

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報
17

平成13年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

2003年3月

序

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの多くの貴重な遺跡が包蔵されています。キャンパスの施設整備事業に伴う発掘調査を行うため、昭和60年に埋蔵文化財調査室が発足しました。これまでの調査結果ならびに研究成果は、埋蔵文化財調査室年報（Vol.1～16）として逐次報告されてきました。

ここに平成13年度の調査結果の報告として、鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Vol.17を刊行いたします。平成13年度には郡元キャンパスにおいて発掘調査2件、試掘調査1件、立会い調査6件、桜ヶ丘キャンパスでは発掘調査1件、立会い調査3件が行われました。本年報には、それらの中から整理作業が終了した郡元キャンパスの発掘調査1件と郡元キャンパスの試掘調査1件・立会い調査1件の成果を報告いたします。

平成13年度の調査概要を1章にまとめました。2章には郡元キャンパスのサークル棟建設地での発掘調査を掲載しました。この調査により、弥生時代中期後半（約2000年前）の遺構や土器などの遺物とその時期の単純層から出土し、それまで空白期間であった当時の様子が具体的に確認できました。これによって、郡元キャンパスでは弥生時代中期の始めから古代までの約1100年間、連続して人間が生活していたことがわかってきました。

郡元キャンパス総合研究棟（理工系）の試掘調査の結果を3章に報告しています。この調査によって、弥生時代の水田の可能性のある層が確認され、本調査に向けて良好なデータを得ることができました。4章では立会い調査の結果を掲載していますが、特に、これまで未調査だった桜ヶ丘キャンパスの運動場で弥生時代の遺物包含層が良好な状態で残り、遺構が存在していることが判明しました。

その他として、埋蔵文化財調査室の要項と受像贈図書のリストを掲載しました。また付編として、郡元キャンパスの遺跡群における自然科学分析結果を報告しています。この分析結果からは、放射性炭素年代測定により古墳時代の住居跡の実年代が、プラント・オパール分析の結果からは3章に掲載している弥生時代中期以前の層が水田であることがわかってきました。

最後にあたり、埋蔵文化財調査室スタッフには、精力的な調査ならびに研究により本事業が支えられていること、ならびにこのように立派な年報が出版されましたことに関して、感謝の意を表したいと存じます。

平成15年2月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会
委員長 辻尾昇三

例 言

- 1 本年報は鹿児島大学構内において、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が平成13年度に行った調査活動の成果をまとめたものである。なお、付編として平成13年度に古環境研究所に依頼した自然科学分析結果報告を掲載している。
- 2 本書に掲載している発掘調査及び立会調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が担当した。個々の調査担当者は各章の調査報告に記述した。調査における図面・写真の担当は以下のとおりである。
2：中村直子・寒川朋枝・王力明・鎌田浩平、
3：寒川朋枝，4：新里貴之・中村・寒川
- 3 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査室が行った。遺物の実測の担当は以下の通りである。
2：寒川・王・中村，3：寒川，4：新里
製図は中村・新里・寒川が担当した。写真撮影は中村・新里が行った。
執筆は1：中村，2：中村，3：寒川・中村，
4：新里が行った。編集は中村が行った。
- 4 付編掲載の出土遺物に関しては、橋本達也氏・本田道輝氏・渡辺芳郎氏（鹿児島大学）のご教授を賜った。また、石器の石材に関しては、大塚裕之氏（鹿児島大学）のご教授を賜った。
- 5 発掘調査による遺物の保管は、埋蔵文化財調査室の管理の下、各学部、部局が収蔵している。また、図面・写真などの資料は埋蔵文化財調査室に保管している。

凡 例

- 1 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便であるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地（旧宇宿団地）とに設定した。その設置基準は以下のようである。
(1) 郡元団地では、国土座標第2座標系（ $X = -158.200$ ， $Y = -42.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割りを行った（Fig.3参照）。
(2) 桜ヶ丘団地では、国土座標第2座標系（ $X = -161.600$ ， $Y = -44.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割りを行った。
- 2 本年報において報告を行った調査地点については、Fig.3にその位置を記している。
- 3 本年報におけるレベル高はすべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
- 4 本書で使用した遺構の表示記号は以下の通りである。
SK：土壙状遺構 SD：溝状遺構 P：ピット
- 5 2・付編で使用した土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
- 6 遺物については観察表を作成した。その表記、表現については以下の通りである。
色調：『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用し、この色調に当てはまらないものについては、「～に類似」と表記した。
胎土：砂粒の種類については、特定できないものはその色調で表記した。粒子の大きさは礫（～3mm）、粗砂粒、砂粒、細砂粒に分けた。胎土中の砂粒の多さについては、便宜的に1～5の5段階に分けた。5：15%以上，4：10%前後，3：5%前後，2：1%前後，1：1%以下とした。
法量：復原による法量は、（ ）をつけた。
- 7 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致させた。

本文目次

1	平成13年度の調査概要	1
1.1	鹿児島大学構内遺跡の立地と環境	1
1.2	調査概要	1
2	郡元団地M・N-4・5区（サークル棟建設予定地）における発掘調査報告	6
2.1	調査にいたる経過	6
2.2	調査の体制	6
2.3	調査の経過	6
2.4	層位	6
2.5	遺構	9
2.6	遺物	10
2.7	まとめ	17
3	郡元団地K-9区（総合研究棟Ⅱ建設予定地）における試掘調査報告	19
3.1	調査にいたる経過	19
3.2	調査の体制	19
3.3	調査の経過	19
3.4	層位	19
3.5	遺構と遺物	20
3.6	試掘調査の結果	22
4	立会調査	23
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室要項	34
	受贈図書一覧	36
付編	鹿児島大学構内遺跡群郡元団地における自然化学分析	41
	Ⅰ．放射性炭素年代測定	42
	Ⅱ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析	43

1 平成 13 年度(2001 年 4 月～2002 年 3 月)の調査概要

1.1 鹿児島大学構内遺跡の立地と環境

鹿児島大学構内遺跡が所在する鹿児島市は、薩摩半島の北東部に位置する。東側には鹿児島湾（錦江湾）が広がり、他の三方は始良カルデラに由来するシラス台地に囲まれている。本書に掲載する調査地点は、鹿児島大学構内の郡元団地と桜ヶ丘団地で、それぞれを、鹿児島大学構内遺跡郡元団地、同桜ヶ丘団地と呼んでいる。郡元団地は沖積平野の南端部付近に位置し、標高約 7m を測る。従来から周知の遺跡として知られており、校舎などの建設に伴う事前の発掘調査も多く行われている。昭和 59 年までは字名などが遺跡の名称として用いられており、県立医大遺跡、付属中学校敷地内遺跡、釘田遺跡、水町遺跡も郡元団地内の遺跡である¹⁾。付近には弥生時代の住居が検出された一ノ宮遺跡²⁾がある。郡元団地では古墳時代の住居跡群が多く発見され、現在三つの住居群が把握できている。一つは郡元キャンパスのほぼ中央部、もう一つは南西部で、いずれも微高地上に形成されている。中央に位置する住居群のすぐ北側には河川が確認されている。河川の中からは弥生時代から古墳時代にかけての木製品や木杭が出土している。平成 9 年度の工学部における調査では、弥生時代の水田跡が検出されている。古墳時代の水田跡は現在のところ、構内ではまだ発見されていないが、古墳時代の包含層中には多量のイネ・プラント・オパールが含まれており³⁾、稲作が継続的に行われていたことがわかる。桜ヶ丘団地は郡元団地から南に約 2.5km の亀ヶ原台地上に位置し、標高約 70m を測る。昭和 60 年に埋蔵文化財調査室が設置されてからは、「鹿児島大学構内遺

跡宇宿団地」と呼称したが、キャンパス名の変更に伴い、桜ヶ丘団地と呼んでいる。付近の台地上には、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡が点在しており、桜ヶ丘団地でも同様の時期の遺物が出土している。また、縄文時代早期、弥生時代前期の住居跡も確認されている。

1.2 調査概要(Tab.1)

平成 13 年度は、前年度から継続した調査も含めて、発掘調査 3 件、試掘調査 1 件、立会調査 9 件を行った。このうち、2001-1 と 2001-3、立会調査の調査報告については本年報に掲載している。

郡元団地では、2001-2・B において古墳時代後半期の住居跡群を検出し、そこから多くの遺物が出土した。また、2001-1・2 において、これまで遺構がはっきりしなかった弥生時代中期の遺構が確認でき、また、古墳時代後半期遺物包含層との明確な層位的な新旧関係を把握することができた。弥生時代中期の遺物は、郡元団地内にてよく出土していたのだが、古墳時代後半期の遺物包含層に混在していることが多く、それは古墳時代後半期の住居跡によって弥生時代中期の包含層が攪乱されたためと推定してきたが、この 2 つの調査によって、弥生時代中期単独の遺物包含層を確認できたことは、大きな成果であった。

また、2001-3 の試掘調査によって、弥生時代中期もしくはそれ以前の水田跡と考えられる層を確認できた。2001-3 と 2001-2 の場所は近接しており、弥生時代中期前半における居住エリアと生産エリアの関係を把握する良好な遺構となった。

桜ヶ丘団地では、平成 12 年度から継続して 2000-2 の調査を行ったが、約 11000 年前に噴出した薩摩火山灰層の下層から陥し穴を 4 基確認した。後期旧石器～縄文時代草創期の時期にあたるものと考えられる。この成果を一般市民に公開するため、6 月 23 日に遺跡説明会を行い、約 50 名の参加者が集まった。

また、古墳時代や弥生時代の遺物および弥生時代の遺構が 2001-C において確認できた。弥生時代の遺構および遺物は桜ヶ丘団地の北東部において検出されていたが、北西部にあたる 2001-C では当時の包含層や遺構がより良好に残存していることが確認できた。

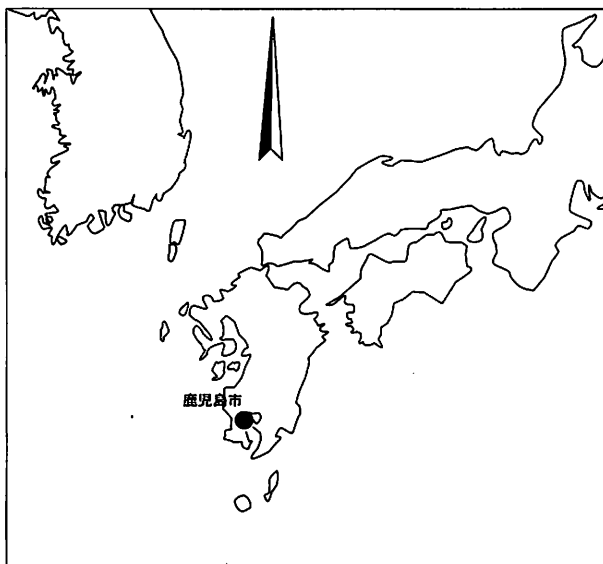


Fig.1 鹿児島市の位置

1 平成 13 年度の調査概要

Tab.1 平成 13 年度調査一覧

調査コード	種類	地区	事業名	期間	備考
2000-2	発掘調査	桜ヶ丘団地 H・I-8・9	保健学科校舎建設	2001年2月5日～7月20日	後期旧石器～縄文時代草創期陥し穴遺構4基、遺跡説明会実施
2001-1	発掘調査	郡元団地 M・N-4・5区	サークル棟建設	2001年9月20日～11月5日	弥生時代中期溝状遺構、ピット群、古墳時代遺物、本書2章に報告掲載
2001-2	発掘調査	郡元団地 J-7・8区	理学部改修地	2002年3月11日～(9月13日)	古墳時代住居跡群、溝跡、弥生時代住居跡
2001-3	試掘調査	郡元団地 K-9区	総合研究棟II建設予定地	2002年3月13～19日	弥生時代～近世の遺物包含層、本書3章に報告掲載
2001-A	立会調査	郡元団地 I・J-12・13区	情報ネットワーク設備工事	2001年6月11日	
2001-B	立会調査	郡元団地 J・K-3・4区	総合研究棟新営その他電気設備工事	2001年8月6日～24日, 9月3日	古墳時代の住居跡検出, 古墳時代の土器
2001-C	立会調査	桜ヶ丘団地 H-8区	医学部 RI 施設配管工事	2001年8月20日	弥生時代の住居跡検出, 弥生土器
2001-D	立会調査	桜ヶ丘団地 I-9・K-8区	医学部保健学科新営その他工事	2001年8月22・23日	
2001-E	立会調査	郡元団地 H-6区	農学部保存樹林内掘削(学祭時のゴミ穴)	2001年11月9日	
001-F	立会調査	郡元団地 M-4・5区	課外活動施設新営機械設備工事	2001年11月28日・12月22・23日・2002年1月10日・2月22日	
2001-G	立会調査	郡元団地 M・N-0-6・7・8区	教育学部幹線並木整備工事	2002年1月10日・2月5～17日	
2001-H	立会調査	郡元団地 D・E-4, K-10, P-5, J・K-9区	理学部支障樹木移植等工事	2002年3月22・23・25・26・29日	
2001-I	立会調査	桜ヶ丘団地 I-8区	医学部校舎新営その他機械設備工事	2002年3月25日	

註

- 1) 松永幸男 1986「第Ⅱ章 鹿児島大学構内遺跡の位置と環境」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅰ 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 2) 河口貞徳 1951「一の宮遺蹟報告」『考古学雑誌』第37巻第4号 日本考古学会
- 3) 郡元団地 L-6 区(中央図書館:未報告) によるプラント・オパール定量分析の結果などによる



Fig.2 鹿児島大学構内遺跡の位置 (S=1/50000)

1 平成13年度の調査概要

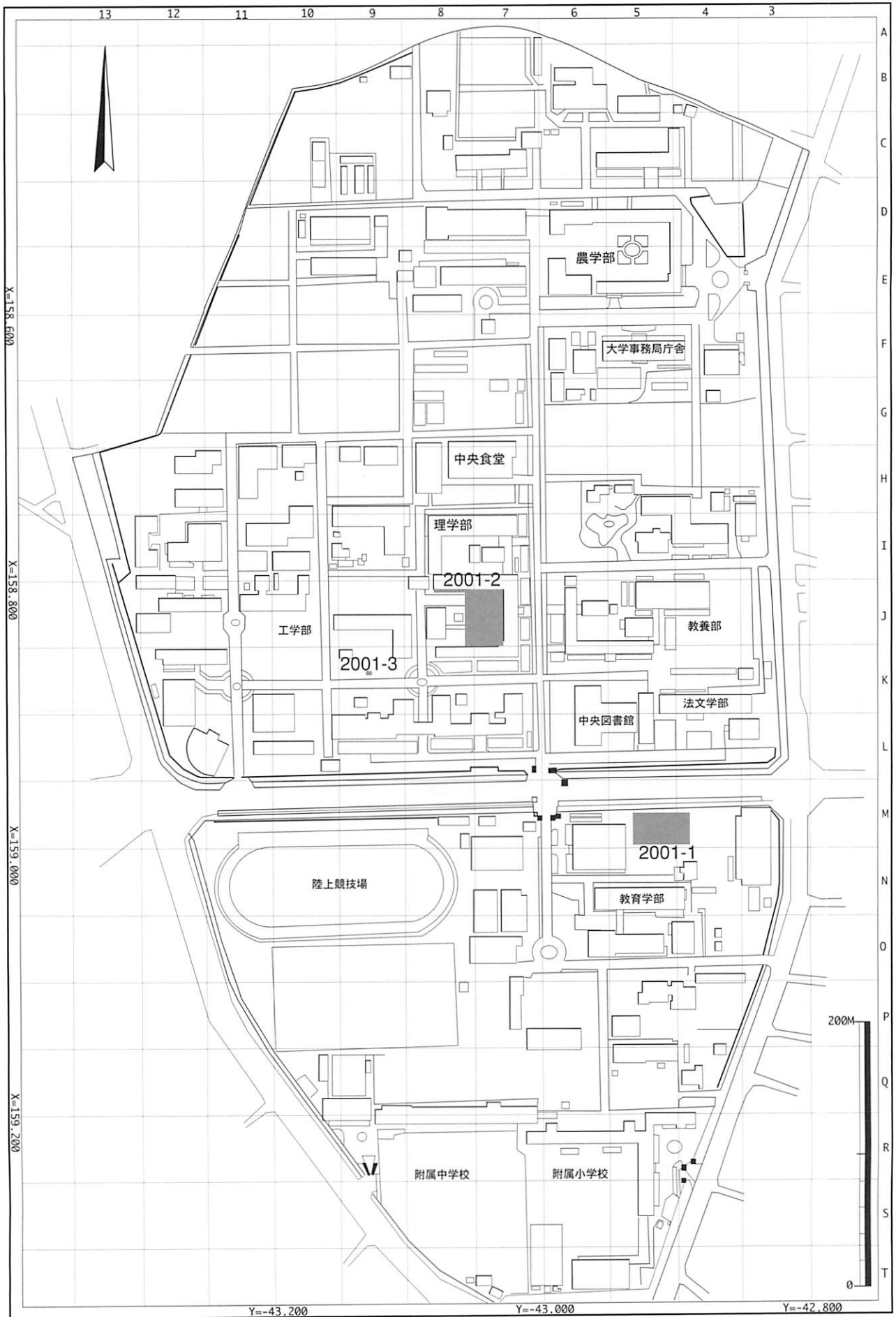


Fig. 3 郡元団地構内図(S=1/4000)

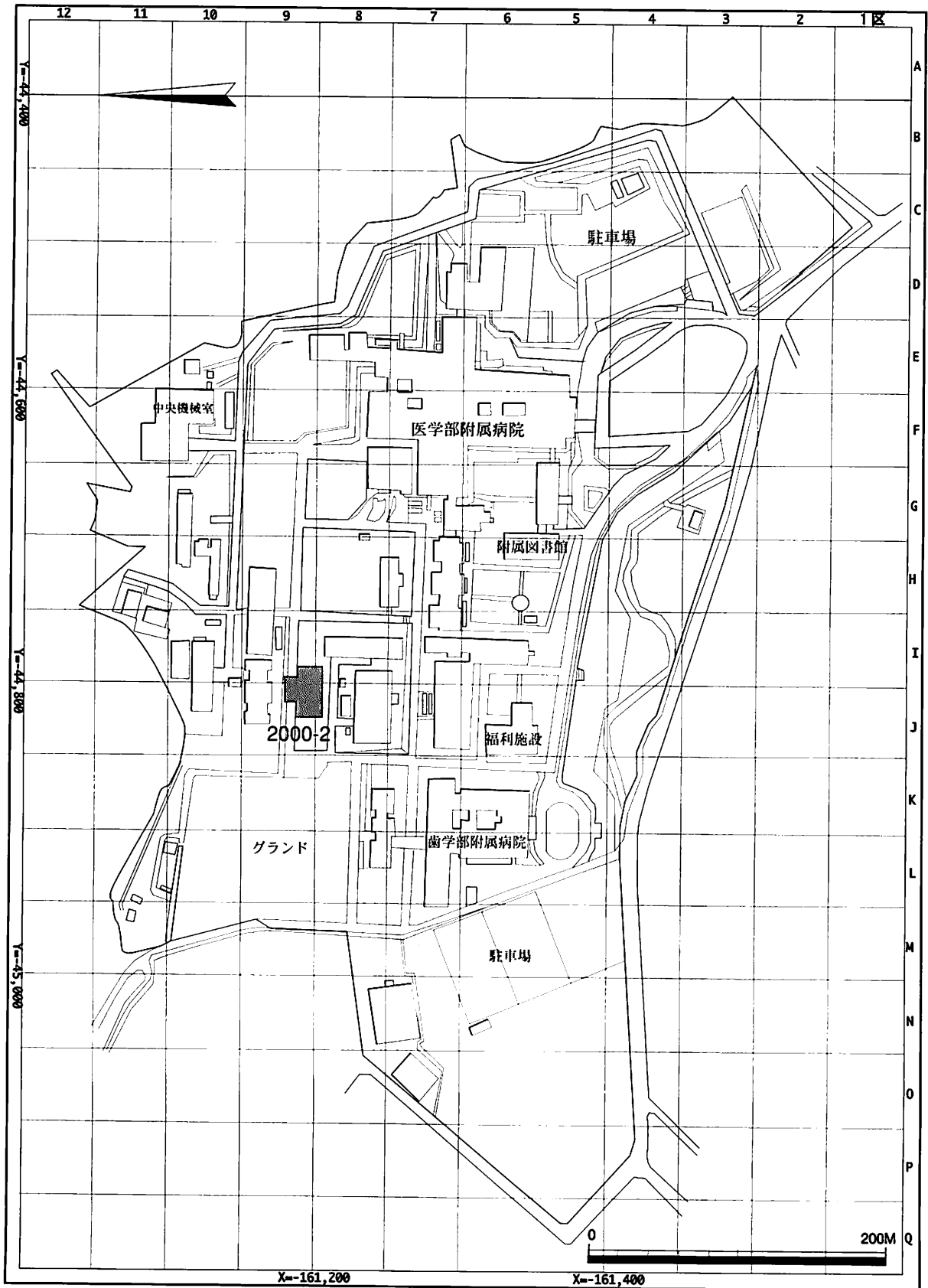


Fig. 4 桜ヶ丘団地構内図(S=1/4000)

2 郡元団地 M・N-4・5区(サークル棟建設地)における発掘調査報告

2.1 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地内にサークル棟の建設が計画され、教育学部プール西側がその予定地とされた。本調査区東側では、平成5年度にプール建設に伴う試掘調査を行ったが、その結果、プール建設地では地表下1.5mまでは客土などの表土であることがわかっていった。しかし1.5m以下には遺物包含層が残存している可能性があったため、本地点においても埋蔵文化財が包蔵されていることが推定された。

工事における掘削深度が90cmの予定であったため、それ以上のレベルに遺物包含層が存在しているかどうかを確認するため、平成13年8月1日に重機による試掘調査を行った。建設予定地に4か所のトレンチ(黒い四角部分)を設定し(Fig.5)、層を確認したところ、建設地の西側半分で埋蔵文化財に影響があることがわかったため、その部分について事前の発掘調査を行うことになった(Fig.5)。

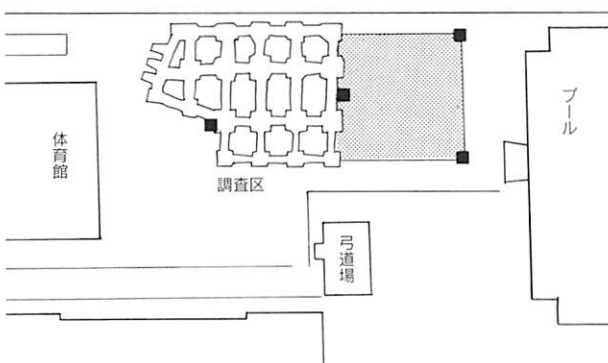


Fig.5 調査区と試掘トレンチ位置図
あみかけ部は建設予定地のうち、調査不要と判断した。

2.2 調査の体制

発掘調査は以下の体制で行った。

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 新田栄治

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室員 中村直子・寒川朋枝・王力明

調査作業員 安倍松伊都子・石谷喜恵子・石谷美智子・岩戸トシ子・襲谷ミエ子・上床久美子・坂口ミエ子・寺光ミツ子・新海ミチ子・末吉サチ子・末吉佐知子・瀬戸口諭・藪田裕子・谷口スズ子・谷口ノリ・谷口ミヤ子・粒崎幸蔵・中原清一・中原マス子・中原チエ・名越ヒデ子・新原和子・野下月雄・増満ミエ子・松下郁美・松下トミエ・盛満アイ子・矢住純子・柳田ノリ子・吉永幸子・脇カツ子・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子・脇藤雄・鎌田浩平

2.3 調査の経過

調査は平成13年9月25日～11月4日の期間に実施した。建物の基礎部分とそれをつなぐ梁部分のみの掘削工事を行う予定であったため、調査もその部分のみを行った(Fig.6)。

調査区内の北側には、木造校舎とプレハブがあり、その撤去に10月中旬までかかったため、最初に南側部分から先に調査を行い(PL.1)、木造校舎等が撤去された10月12日以降に残りの部分の調査を行った。

なお、基礎部分の工事掘削深度は90cmであったため、調査は地表下100cmまでとした。ただし、それ以上のレベルで検出された遺構についてはすべて掘り下げて調査を行った。基礎部分をそれぞれ、1～22トレンチとし、それぞれをつなぐ梁の部分をa-bトレンチ(1トレンチと2トレンチの間は1-2トレンチ)と呼称した。

基本土層については、1層から5層までを確認した。しかし、南東部は掘削が地表下1.5～2mにまで及んでおり、プライマリーな層は残っていなかった。

掘削は層ごとに行ったが、2～4層で遺構や遺物が確認できたので、それぞれの測量・写真撮影などを行った。全体的に掘削は@cmまでで留めたが、それ以下の層の確認のため、10トレンチの一部を地表下@cmまで深掘りした。掘削作業が終了した後は、土層の測量・写真撮影・観察などを行った後、調査を終了した。

2.4 層位 (Fig.2)

層位は1～5層までを確認した。このうち、4層は4a・4b・4c層と3つに細分できた。いずれも整合的に堆積しているが、南東部は攪乱が深くまで及んでいて、プライマリーな層が残っていない部分も多かった。

1層 表土。コンクリートや瓦礫を含む。2～5層土がブロックもしくは混在した土層となって堆積している部分もある。大規模な掘削の後、掘削した土をまた埋め戻しているようである。



PL.1 調査区南側(1～8トレンチ)

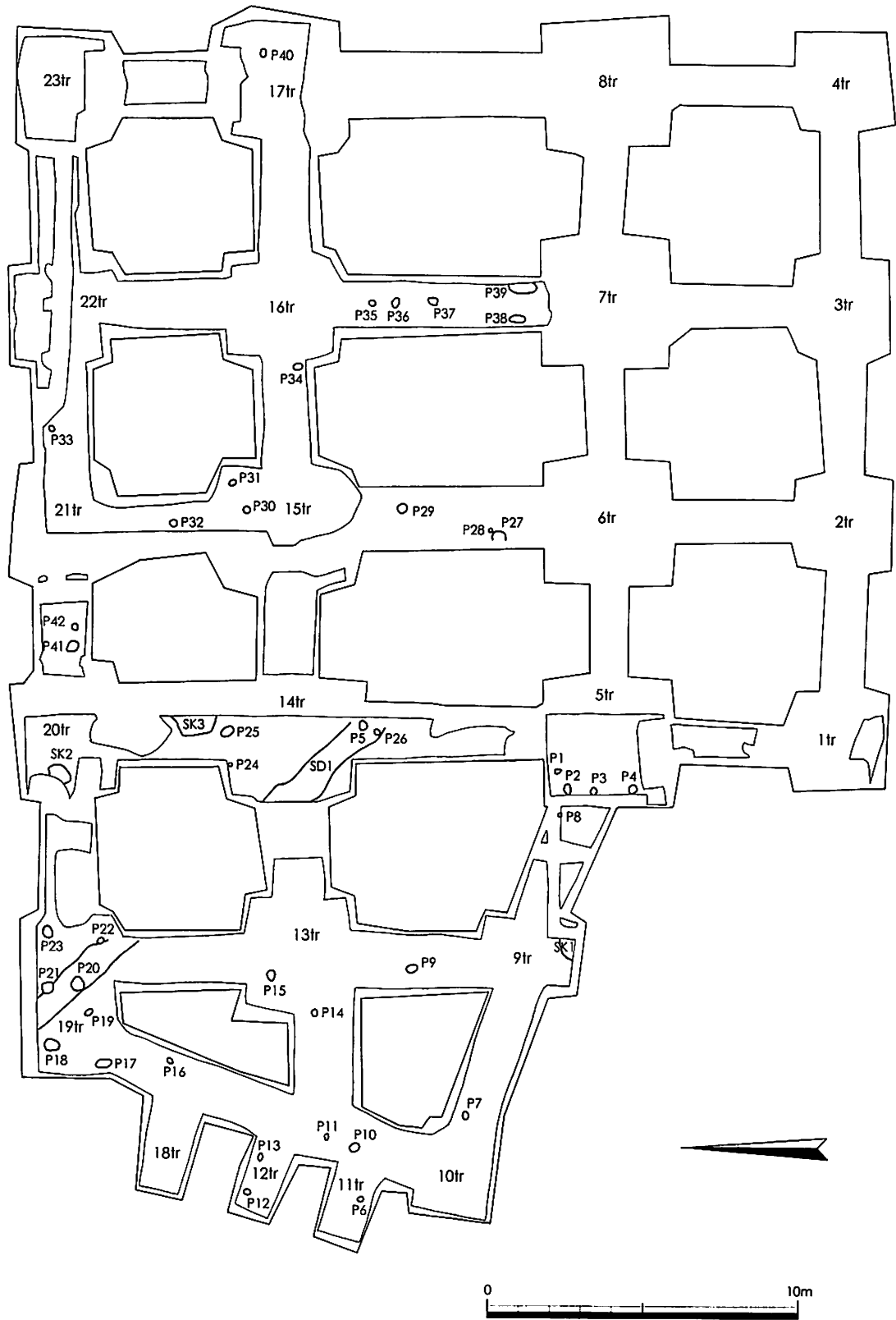
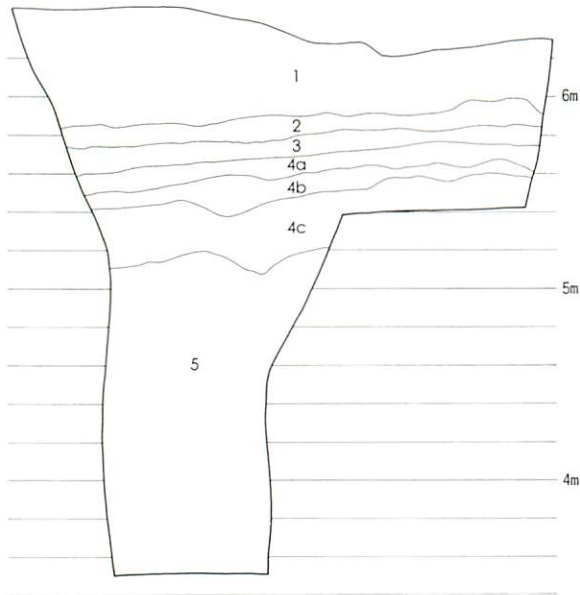
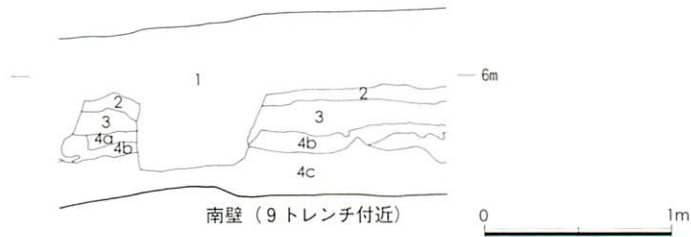


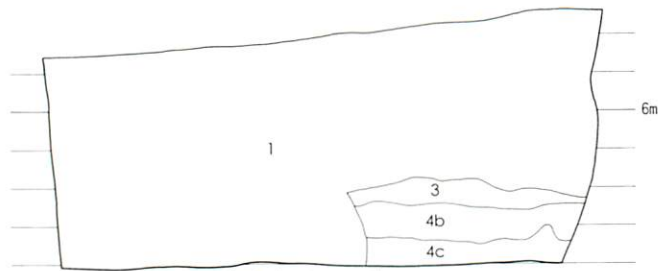
Fig.6 調査区と遺構配置図 (S=1/200)



西壁 (10 トレンチ)



南壁 (9 トレンチ付近)



東壁 (23 トレンチ)

Fig.7 層位断面図 (S=1/30)



PL.2 12 トレンチ西壁



PL.3 23 トレンチ東壁



PL.4 調査区全景 (完掘)

- 2層 褐灰色 7.5YR4/1 シルト質砂。
- 3層 褐色 7.5YR4/6 シルト質砂。
- 4a層 褐色 7.5YR4/3 砂混じりシルト。
- 4b層 黒褐色 10YR2/2 シルト。
- 4c層 黒色 7.5YR2/1 砂質シルト。
- 5層 砂層。

このうち、遺構・遺物が確認できたのは、1～4層までである。

2.5 遺構

遺構は、3層中および4c層上面で確認した。3層ではSK1を、4c層上面では溝状遺構のSD1とピット43基を検出した。以下、遺構ごとに説明を加える。

SK1

調査区南側の9トレンチで検出した。検出層は3層中だが、埋土が2層土に類似していることなどから、本来は3層上面から掘り込まれていたものと考えられる。南側は調査区外に、東側は攪乱にかかっており、全形はわからない。残存部から、平面形は径1mほどの円形を呈すると推定できる。深さは最深部で13cmと浅い。底面は緩やかなレンズ状を呈し、立ち上がりはほぼ直立している。

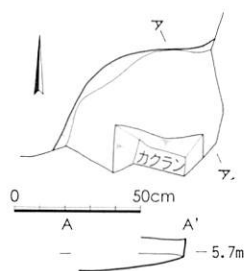
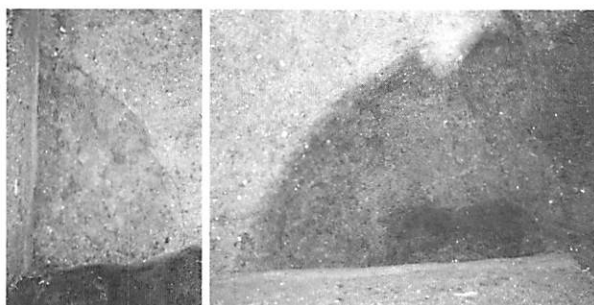


Fig. 8 SK1 (S=1/30)



PL. 5 SK1 左検出状況, 右: 完掘状況

SK2

4c層上面で検出した。調査区北側の20トレンチに位置する。西側は一部攪乱のために壊されている。ほぼ楕円形で長径86cm, 短径49cm(残存部のみ)を測る。北側に段を有し、南側はピット状を呈する。最深部で51cmの深さがある。埋土は、黒褐色 10YR2/2 シルトで4b層土

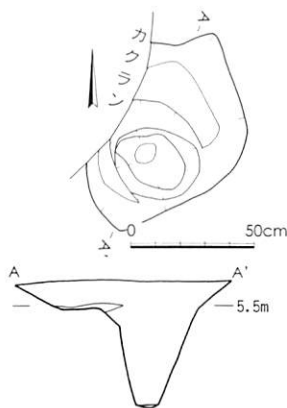
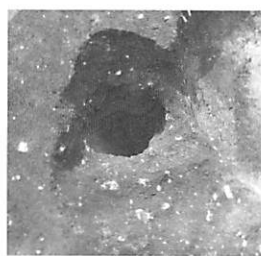


Fig. 9 SK2 (S=1/30)



PL. 6 SK2 完掘状況



PL. 7 SK2 埋土断面

に類似している。

SK3

5層上面でSK3を検出した。調査区中央部やや北よりの14-20トレンチに位置し、東側半分は攪乱に壊されている。残存部で長さ108cm, 最深部は検出面から約30cmを測る。埋土は2層に細分される。埋土②は、5cmほどの厚さで土壌の側面に沿って、その内側に埋土①が堆積している。

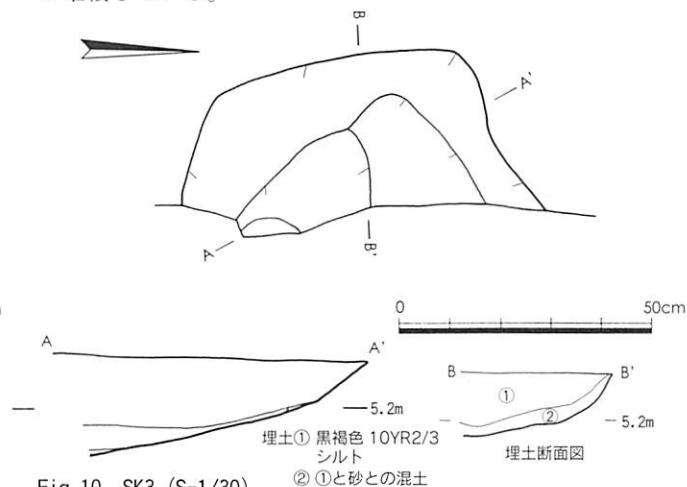
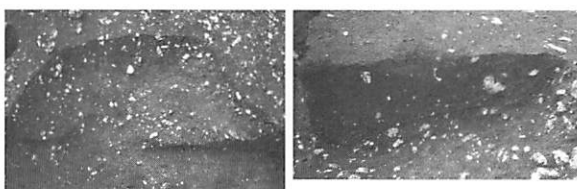


Fig. 10 SK3 (S=1/30)

埋土① 黒褐色 10YR2/3 シルト
② ①と砂との混土



PL. 8 SK3 左: 完掘状況, 右: 埋土断面

SD1

調査区北西部にSD1は位置する。5層上面の19トレンチと14トレンチで検出した。北西-南東方向を向いている。幅50~60cm, 深さ約25cmで、横断面形は底面が平坦で台形状を呈する。埋土は5つに分層でき、レンズ状に落ち込んで堆積している。遺物は出土していない。



PL. 9 SD1 検出状況

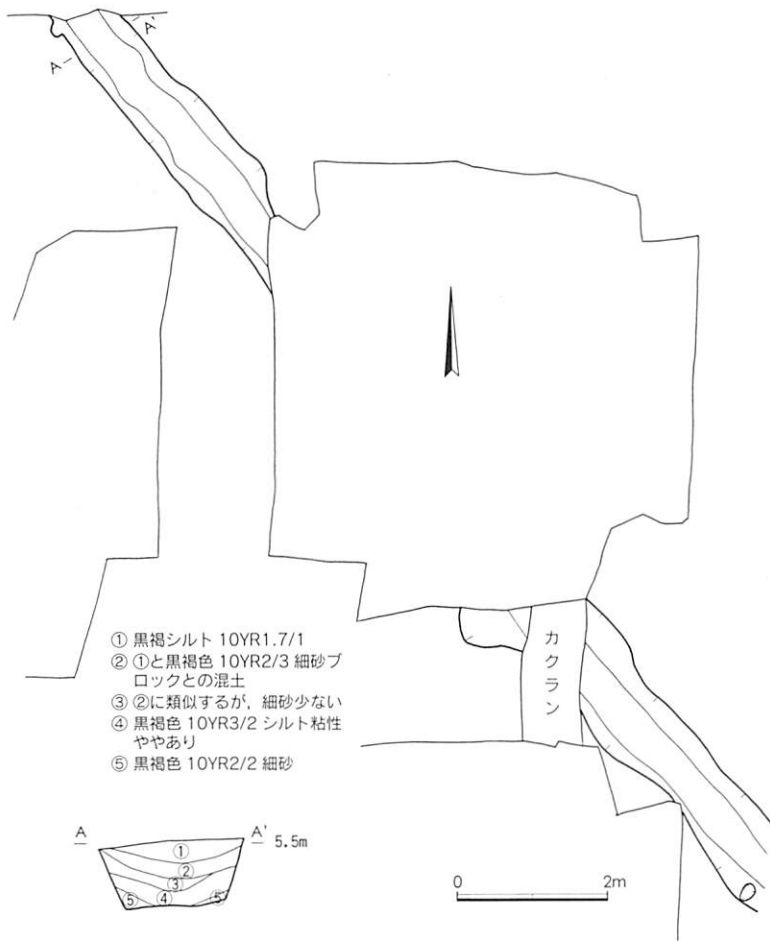
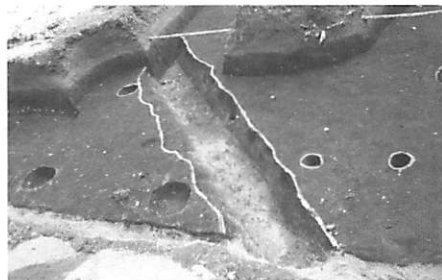


Fig.11 SD1 (S=1/100)



PL.11 SD1 完掘状況 (19 トレンチ付近)

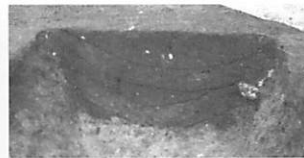


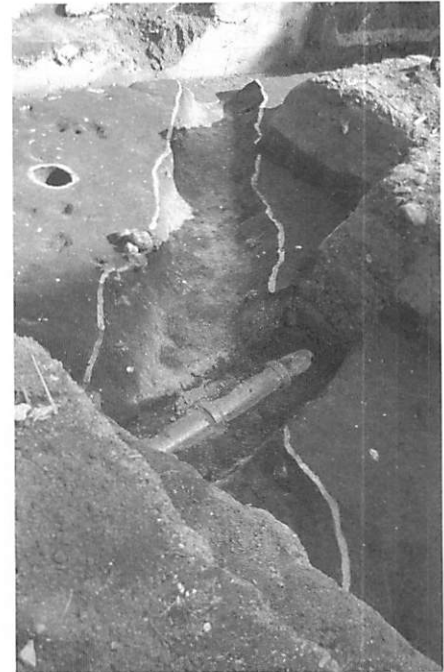
Fig.12 SD1 埋土断面

ピット群

調査区全域にピットを検出した。検出面は5層上面で埋土はほとんど4c層土に類似しているが、明らかな配列が認められるようなものはない。SD1を切っているものもある。出土遺物はない。深さは、5～40cmとばらつきがある。埋土はほとんどが検出面直上の4c層に類似している。

2.6 出土遺物

総出土遺物数は490点であった。実測可能なものは、Fig.12～16に図示し、Tab.3～5に観察表を提示した。



PL.10 SD1 (14 トレンチ)

Tab.2 ピット一覧表

	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土
P1	26.0		10.7	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P2	49.0	30.0	24.3	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P3	26.0		11.3	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P4	31.0		34.8	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P5	33.9	24.8	19.1	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P6	19.0		6.7	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P7	29.5	17.5	20.6	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P8	15.0		18.1	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P9	34.0		17.9	黒色10YR1.7/1シルト
P10	31.5		23.3	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P11	16.0		20.6	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P12	28.0	17.0	14.1	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P13	24.0	16.0	15.7	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P14	23.0	15.0	14.3	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P15	34.0	30.0	17.6	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P16	24.0	15.0	13.5	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P17	53.0	30.0	40.9	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P18	26.0	19.0	16.3	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P19	30.0	20.0	10.5	黒褐色10YR2/2細砂
P20	49.0	41.0	19.9	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P21	41.0		36.2	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P22	23.0		7.0	黒褐色10YR2/2細砂
P23	43.0	32.0	32.9	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P24	10.0		9.9	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P25	43.0	30.0	28.0	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P26	29.0	14.0	11.8	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P27	43.0		13.1	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P28	17.0		10.0	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P29	33.0		20.7	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P30	23.0		23.5	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P31	25.0	21.0	29.3	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P32	27.0	21.0	18.0	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P33	18.0		1.2	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P34	29.0	21.0	18.1	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P35	22.0		21.6	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P36	34.0	23.0	21.9	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P37	36.0	26.0	13.1	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P38	60.0	25.0	19.6	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P39	99.0	34+α	25.4	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P40	26.0	20.0	37.4	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P41	44.5	38.0	24.8	黒褐色10YR2/3細砂
P42	20.0		25.4	黒褐色10YR2/2細砂
P43	24.0		18.5	黒色7.5YR2/1砂質シルト
P44	17.0		5.2	黒色7.5YR2/1砂質シルト

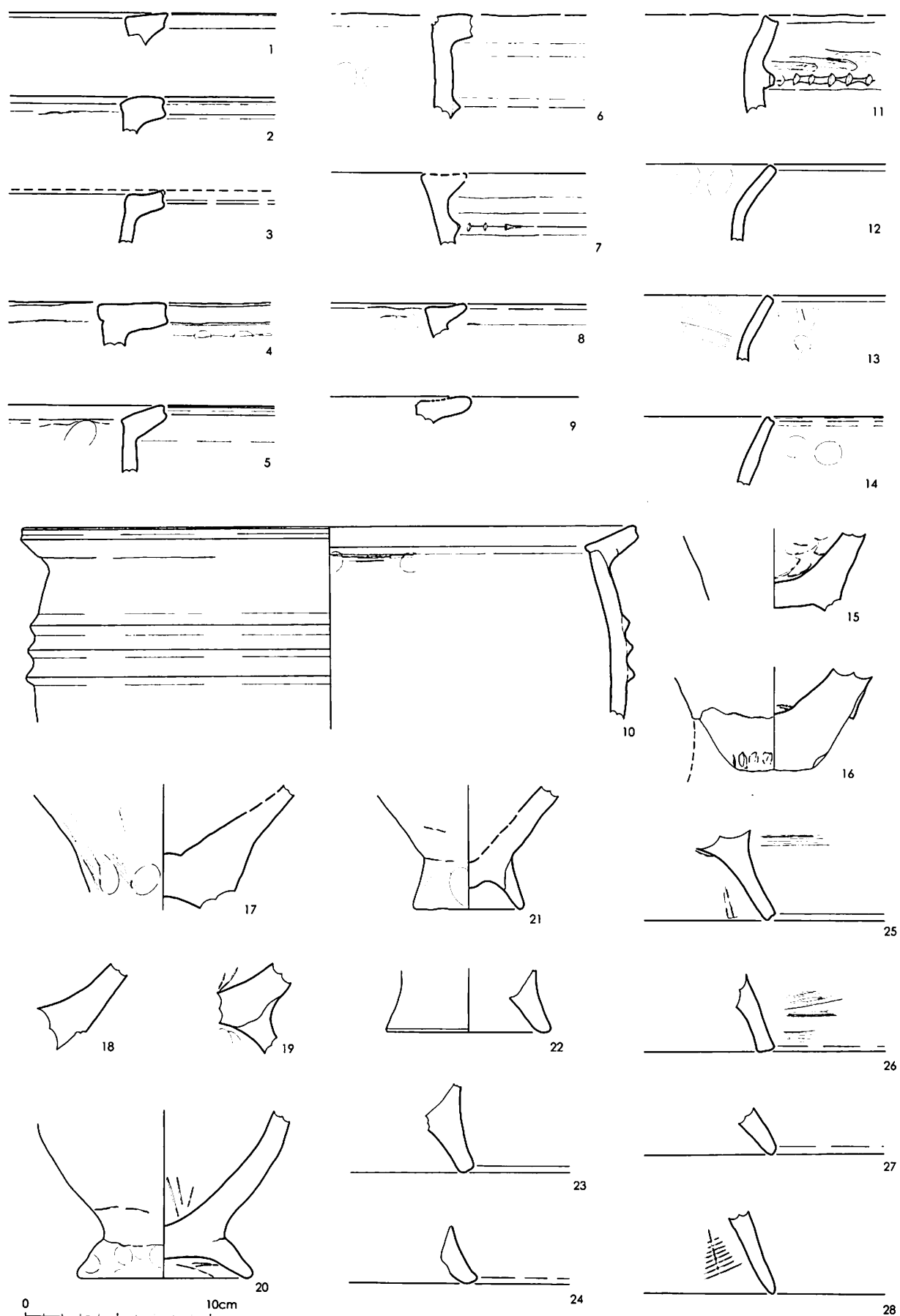
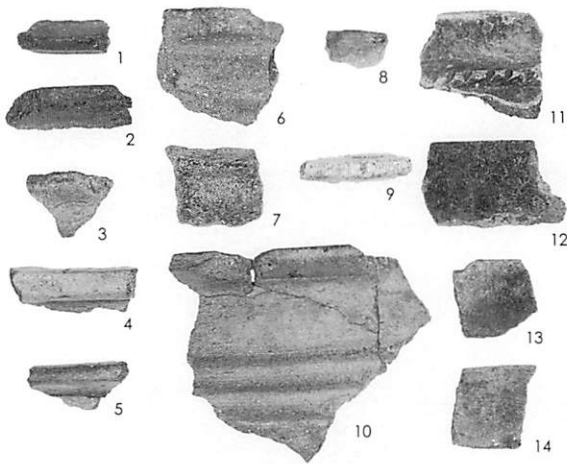
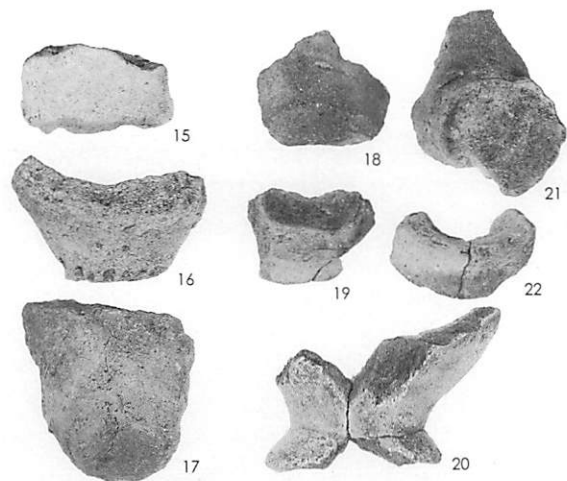
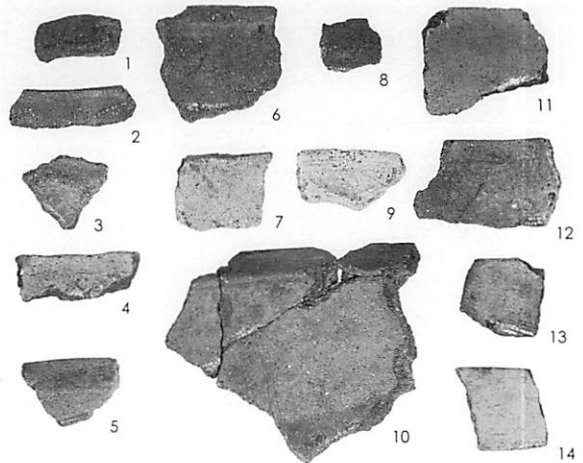


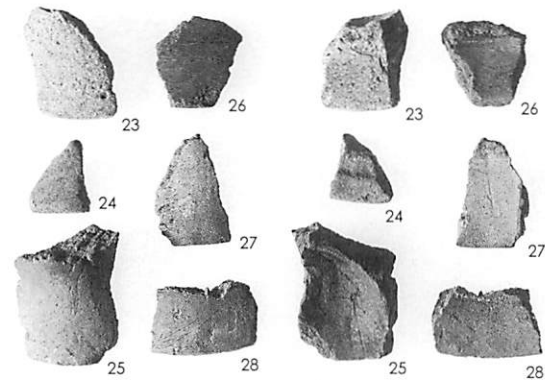
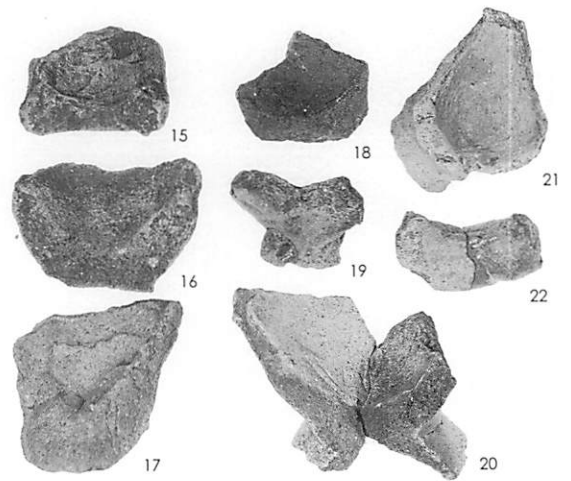
Fig.12 出土遺物 (1) (S=1/3)



PL.13 甕 (1~14 左:外面,右:内面)

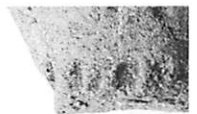


PL.14 甕 (15~20 左:外面,右:内面)



PL.16 甕 (21~28 左:外面,右:内面)

PL.15 16 接合痕拡大



出土遺物の種類は、弥生土器、古墳時代の土器、須恵器、土師器、陶器、磁器、石鏃、土錘、擦り石で弥生時代中期から近代までの時期の遺物が散布していた。弥生・古墳時代の土器には、甕・壺・高杯・罎の器種が見られる。以下、実測できるものを図示し、説明をする。甕(Fig.12)

1~4は入来Ⅱ式の甕の口縁部である。口唇部をヨコ

ナデによって窪ませる形態を呈する。1は頸部に続く部分が接合部で欠損している。4は大型のものである。5・10は山ノ口式の口縁部である。10は3条突帯を施し、シャープなつくりの胴部上半部である。口縁部の接合線が外面と内面に認められる。6は口唇部と口縁部内面が欠損しているため、型式は不明だが口縁部の立ち上がりから入来Ⅱ式に比定できそうである。7は口縁部上面が剥落しており、口唇部形態が不明だが、口唇部を丸く仕上げ、上面が少し窪むものと推定できる。小さな刻みをもつ刻み目突帯が1条施されている。8・9は端部は丸く、上面は少し窪むもので黒髪式の系統のものと考えられる。8は少し粗雑なつくりで、9は内面が一部欠損している。

11~14は弥生時代後期から古墳時代前期の範疇に入る甕の口縁部である。ゆるくくの字状に外反する形態

Tab.3 遺物観察表(1)

No	層	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
						混和材	砂粒の 多さ		
1	4c	弥生	甕	口縁部	内外面・器内：褐色7.5YR4/3.	粗砂：半透明粒・金色の雲母。細砂：半透明粒・白色粒・黒色粒・金色の雲母。	4	内外面：ヨコナデ。	接合痕で欠損。
2	4c	弥生	甕	口縁部	内外面・器内：にぶい褐色7.5YR5/4.	礫：白色粒。粗砂：白色粒・石英・赤色粒・黒色粒・金色の雲母。細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒・金色の雲母。	4	内外面：ヨコナデ。	外面スス付着
3	4c	弥生	甕	口縁部	外面：褐色7.5YR6/6。内面：にぶい褐色7.5YR6/4。器内：にぶい黄褐色10YR6/4.	粗砂：白色粒・石英。細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒。	3	内外面：ヨコナデ	
4	1	弥生	甕	口縁部	外面：にぶい褐色7.5YR6/4。内面：褐色7.5YR6/6。器内：灰褐色7.5YR5/2.	礫：軽石・白色粒・黒色粒。粗砂：白色粒・石英・赤色粒・黒色粒・角閃石。細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒。	3	外面：ヨコナデ。内面：接合線をユビオサエ	入来Ⅱ式。
5	4b	弥生	甕	口縁部	外面：褐色7.5YR4/3。内面：にぶい褐色7.5YR5/4。器内：にぶい褐色7.5YR5/4	礫：白色粒。粗砂：赤色粒・金色の雲母・白色粒・赤色粒・黒色粒。細砂粒：白色粒・黒色粒・赤色粒・金色の雲母。	4	内外面：ヨコナデ 内面：ユビオサエ。	入来Ⅱ式。外面にややスス付着。
6	1	弥生 土器	甕	口縁部	外面：にぶい褐色7.5YR5/4。内面・器内：鉄分付着のため不明	粗砂：白色粒・赤色粒。細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒・金色の雲母。	4	外面：ヨコナデ。内面：ヨコナデ。ユビオサエ痕有り	口唇部を欠損。
7	4b	弥生 土器	甕	口縁部	外面：褐色7.5YR6/6。内面：褐色2.5YR7/6	細砂：白色粒・透明粒・黒色粒・赤色粒。		磨滅のため不明。	磨滅している。口縁部上面表面剥落。
8	4b	弥生 土器	甕	口縁部	外面：灰褐色7.5YR5/2。内面：鉄分付着のため不明。器内：にぶい褐色7.5YR6/3.	粗砂：白色粒・黒色粒。細砂：白色粒・黒色粒。	3	ナデ。内面：ユビオサエ。	磨滅している。
9	4b	弥生 土器	甕	口縁部	上面：灰黄褐色10YR6/2。外面は鉄分付着	粗砂：白色粒・黒色粒・赤色粒・角閃石。細砂：黒色粒・白色粒。	2	外面：ヨコナデ。	磨滅している。口縁部内面端部欠損。
10	4b- .4c	弥生 土器	甕	口縁部	内外面：にぶい褐色7.5YR5/4。器内：にぶい褐色7.5YR5/4	粗砂：金色の雲母・石英・軽石。細砂：白色粒・黒色粒・金色の雲母。	3	外面：ヨコナデ。内面：ナデ。	口徑()。口縁部外面に接合痕あり。
11	1	弥生	甕	口縁部	外面・内面：にぶい褐色7.5YR5/4。器内：黒褐色2.5Y3/1.	軽石礫。粗砂：白色粒・黒色粒・角閃石。細砂：黒色粒・白色粒。	2	ハケ?→ヨコナデ。	外面スス付着。
12	4b	弥生 土器	甕	口縁部	外面：ススのため黒色10YR2/1。内面：灰黄褐色10YR6/2.	粗砂：白色粒・透明粒・軽石。細砂：白色粒・黒色粒。		ヨコナデ。	外面スス付着。
13	不明	弥生 土器	甕	口縁部	にぶい黄褐色10YR7/3.	粗砂：白色粒。細砂：白色粒・黒色粒。		ハケ(外面) (内面 \) →ナデ。	外面スス付着。
14	4b	弥生 土器	甕	口縁部	外面：にぶい褐色7.5YR。内面上部：灰黄色2.5Y6/2。内面下部：灰褐色7.5YR6/2。器内：黄灰色2.5Y5/1.	粗砂：白色粒。粗砂：白色粒。細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒。	3	ヨコナデ。外面にユビオサエ。	外面スス付着。
15	4b	弥生 か古 墳	甕	底部付近	外面：にぶい黄褐色10YR7/3。内面：にぶい黄褐色10YR6/3。器内：明赤褐色2.5YR5/6.	砂粒・細砂粒：白色粒・黒色粒・石英。	3	外面：ナデ。内面：ハケ?→ナデ。	外面に粘土接合痕あり。
16	4b	弥生 か古 墳	甕	底部付近	外面：にぶい褐色5YR6/4。内面：にぶい黄褐色10YR5/3。器内：にぶい褐色7.5YR5/4	礫：軽石。粗砂～細砂：白色粒・黒色粒・石英。	4	ナデ?	脚部は接合部より欠損。接合面に接着を強化するための刻みあり。
17	4層 上面	弥生 か古 墳	甕	底部付近		礫～細砂粒。白色粒・黒色粒・軽石・角閃石・石英。		外面・体部内面：ハケ→ナデ。脚台内面：ナデ。	
18	1	甕	甕	底部付近	外面：にぶい黄褐色10YR6/3。内面・器内：鉄分付着のため不明	粗砂：白色粒・黒色粒・角閃石。細砂：白色粒・黒色粒。	3	調整不明	
19	4b	甕	甕	底部付近	外面：にぶい赤褐色5YR5/4。内面：にぶい褐色5YR6/4。器内：にぶい赤褐色5YR5/4.	細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒。	3	内面：底部にハケ打ち込み痕あり。脚内面：ユビナデ	脚部の一部が接合部より剥落
20	1	甕	甕	胴部下半～底部	外面：にぶい黄褐色10YR7/2。内面：にぶい黄褐色10YR7/3。器内：褐色10YR6/1.	礫：白色粒・黒曜石。粗砂：白色粒・角閃石・黒色粒。細砂：白色粒・黒色粒。	3	外面：ナデ。内面：ハケ?→ナデ。	外面脚台接合部に接合線あり。
21	4b	甕	甕	胴部下半～底部	外面：にぶい褐色7.5YR5/4。内面：にぶい褐色7.5YR6/4。器内：にぶい黄褐色10YR7/2	礫：軽石・白色粒。粗砂：白色粒・黒色粒・角閃石・石英。細砂：白色粒・黒色粒。	3	外面：ユビオサエのちヨコナデ	脚部の一部が接合部より剥落
22	4b- .3	甕	甕	底部	外面：にぶい黄褐色10YR6/3。内面：にぶい褐色10YR6/4。器内：にぶい赤褐色5YR5/4	粗砂：白色粒・軽石。細砂：白色粒・黒色粒・金色の雲母。	3	ナデ?。	接合部より剥落した脚部
23	4b	甕	甕	底部	外面：にぶい褐色7.5YR7/3。内面：にぶい黄褐色10YR7/4。器内：にぶい褐色5YR6/4.	粗砂：黒曜石・石英・白色粒。細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒。	4	磨滅のため不明。	接合部より剥落した脚部
24	1	甕	甕	底部	内外面・器内：にぶい赤褐色2.5YR5/4.	粗砂：白色粒・黒色粒・角閃石。細砂：黒色粒・白色粒。	3	ナデ?。	接合部で欠損。
25	4層 上面	甕	甕	底部	外面：にぶい黄褐色10YR7/3。内面・器内：鉄分付着のため不明	粗砂：白色粒・黒色粒・角閃石。細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒。	3	外面：ハケ(→) →ナデ。内面：ハケ(/) →ナデ。	
26	4b	甕	甕	底部	外面：にぶい褐色7.5YR5/4。内面・器内：鉄分付着のため不明	細砂：白色粒・黒色粒・金色の雲母。	2	内外面：ヨコナデ	
27	4b	甕	甕	底部	外面：にぶい赤褐色5YR5/4。煤付着部灰黄褐色10YR6/2。内面：にぶい褐色7.5YR5/4。器内：褐色7.5YR4/1.	礫：赤色粒。粗砂：白色粒。細砂：白色粒・黒色粒・赤色粒。	3	外面端部：ヨコナデ。他：ナデ。	
28	4b	甕	甕	底部	外面：にぶい黄褐色10YR6/3。内面：にぶい黄褐色10YR7/3。器内：にぶい褐色7.5YR6/4	礫：白色粒。粗砂：白色粒。細砂：白色粒・黒色粒。	2	外面：ヨコナデ。内面：ハケ(/) →ナデ。	

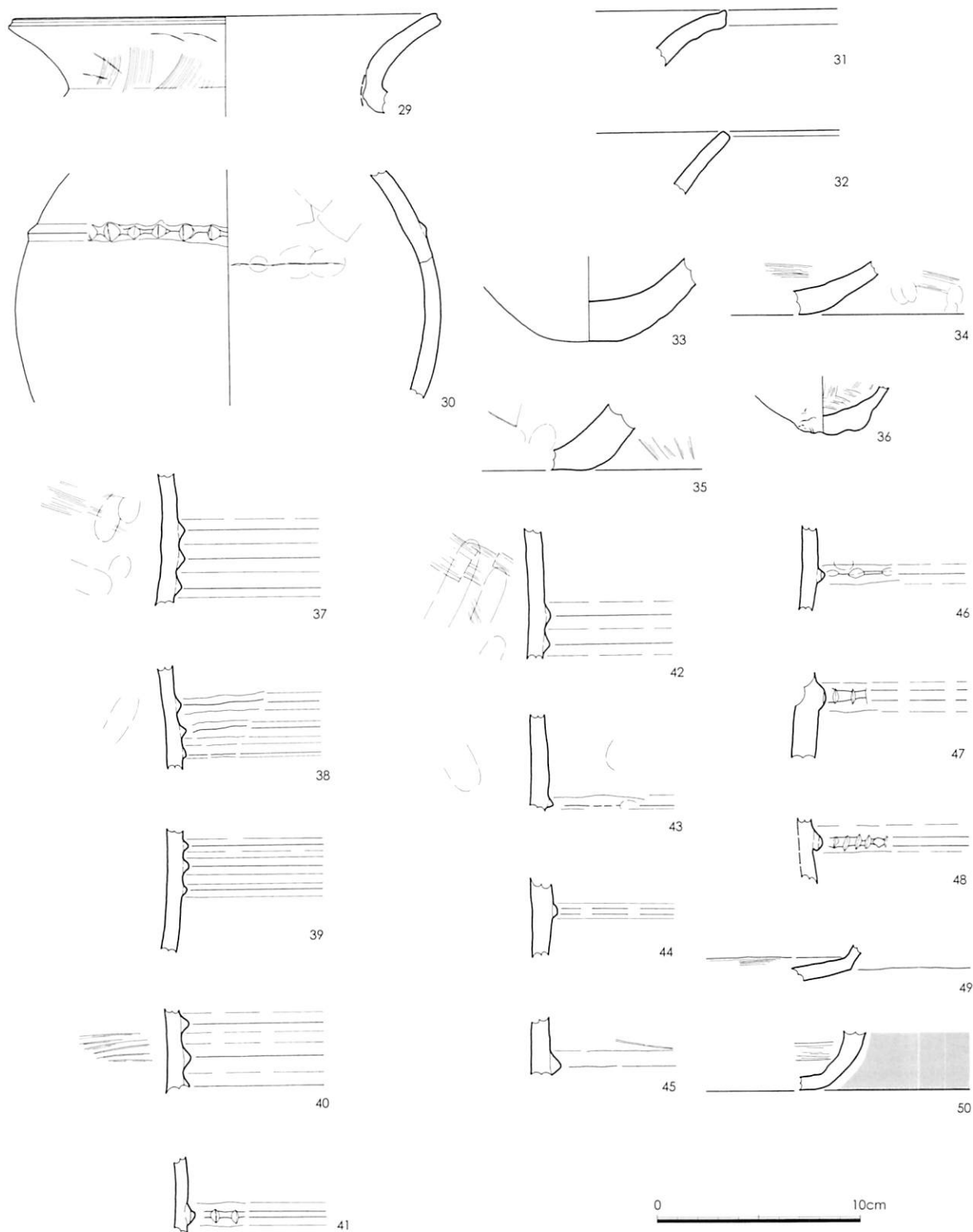


Fig.13 出土遺物 (2) (S=1/3)

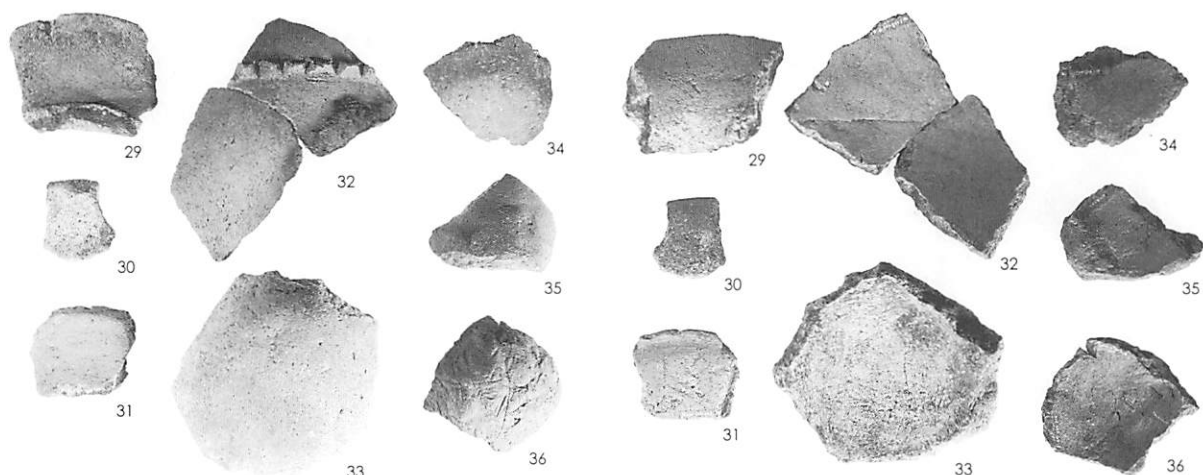
が特徴である。いずれも、口唇部はヨコナデによって仕上げるため、平坦または窪んでいる。11には外面に1条刻み目突帯が施されている。

15～28は甕の底部付近の破片である。15～19は脚部は欠損している。これらから、バケツ型の体部を作成

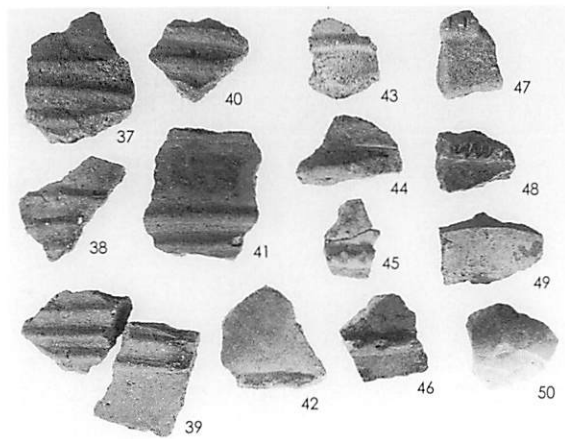
した後、輪状の脚台を外側に貼り付ける制作方法であったことがわかる。16は接合部に接合を補強するための刻みを巡らしている。20・21は底部付近の破片で、脚台は低い。22～24は脚部の破片で、体部との接合部で欠損している。いずれも低めの脚部である。25～28

Tab.4 出土遺物観察表(2)

No	層	種別	器種	部位	色調	胎土			調整	備考
						混和材	砂粒の多 さ			
29	4	弥生	壺	口縁部	外面:にぶい黄褐色10YR6/3. 内面:にぶい黄褐色10YR7/3. 器内:灰色5Y4/1.	礫:白色粒・赤色粒. 粗砂:白色粒・黒色粒・赤色粒・石英. 細砂:白色粒・黒色粒・赤色粒.	3	外面:ハケ(1)→ナデ. 内面:ナデ.	口径() cm.	
30	4b		壺	口縁部		礫:軽石. 粗砂:白色粒・石英. 細砂:白色粒・黒色粒.	3	ナデ.		
31	1			口縁部	外面:浅黄褐色10YR8/3. 内面:鉄分付着. 器内:黄褐色10YR6/2.	粗砂:白色粒・黒色粒・石英. 細砂:黒色粒・白色粒・赤色粒.	4	調整不明		
32	4b	弥生	壺	肩部~胸部	外面・内面:にぶい褐色7.5YR6/4. 器内:黄灰色2.5Y5/1.	礫:軽石. 砂粒・細砂粒:白色粒・黒色粒・石英.	3	外面:突帯付近はヨコナデ. 他はナデ. 内面:ナデ.	内面接合線あり.	
33	4	弥生	壺	底部	外面:にぶい黄褐色10YR6/4. 内面:にぶい褐色7.5YR6/4. 器内:黄褐色10YR6/2.	礫:軽石. 粗砂:白色粒・黒色粒. 細砂:白色粒・黒色粒・角閃石.	3	ナデ.		
34	4a		壺	底部	外面:にぶい赤褐色5YR5/4. 内面・器内:鉄分付着のため不明	礫:白色粒. 粗砂:白色粒・石英・黒色粒・角閃石. 細砂:白色粒・黒色粒.	3	外面:ハケ(1)→ナデ. 内面:ナデ.		
35	1		壺	底部	外面:にぶい黄褐色10YR6/4. 器内:灰黄褐色10YR6/2.	粗砂:白色粒・赤色粒・黒色粒・角閃石. 細砂:白色粒・黒色粒・赤色粒.	3	ナデ.		
36	4b		壺	底部	にぶい褐色7.5Y5/4~にぶい黄褐色10YR5/4.	粗砂~細砂粒:白色粒・黒色粒・石英.	3	繊維状の工具によるナデ. 非常に粗雑.		
37	1	弥生	甕	胸部突帯	外面:灰褐色7.5YR4/2. 内面:にぶい褐色7.5YR5/3. 器内:にぶい黄褐色10YR6/3.	粗砂:白色粒・金色の雲母・黒色粒・石英・軽石. 細砂:白色粒・黒色粒・金色の雲母.	3	外面:ヨコナデ. 内面:ハケ(一)→ナデ.	内外面スス付着.	
38	1	弥生	甕	胸部突帯	外面:にぶい褐色7.5YR5/4. 内面・器内:にぶい褐色7.5YR6/4.	粗砂:白色粒・金色の雲母・黒色粒・石英. 細砂:赤色粒・白色粒・黒色粒・金色の雲母.	3	外面:ヨコナデ		
39	4b	弥生	甕	胸部突帯	外面:にぶい赤褐色5YR5/4. 内面:褐色7.5YR4/4. 器内:褐色7.5YR4/4.	粗砂:白色粒・角閃石・金色の雲母・軽石. 細砂:白色粒・黒色粒・赤色粒・金色の雲母.	4	外面:ヨコナデ. 内面:ナデ		
40	1	弥生	甕	胸部突帯	外面:にぶい黄褐色10YR5/3. 内面:にぶい褐色7.5YR5/4.	粗砂:白色粒・金色の雲母・黒色粒. 細砂:白色粒・黒色粒・金色の雲母.	3	外面:ヨコナデ. 内面:ハケ(一)→ナデ.	外面スス付着.	
41	1	弥生	甕	胸部突帯	外面:褐色7.5YR4/3. 内面:にぶい褐色7.5YR5/4. 器内内側:灰黄褐色10YR5/2. 器内外側:にぶい褐色7.5YR5/4.	粗砂:白色粒・金色の雲母・軽石. 細砂:白色粒・黒色粒・金色の雲母.	3	外面:ヨコナデ. 内面:横方向のナデ.	外面スス付着.	
42	1			胸部突帯	外面:にぶい黄褐色10YR6/3. 内面:浅黄褐色10YR8/4. 器内:灰黄褐色10YR6/2.	粗砂:黒色粒・角閃石. 細砂:角閃石・黒色粒・赤色粒.	4	ナデ.		
43	1			胸部突帯	外面:にぶい褐色7.5YR7/3. 内面・器内:にぶい褐色7.5YR6/4.	礫:白色粒. 粗砂:白色粒・赤色粒. 細砂:白色粒・黒色粒・赤色粒・金色の雲母.	3	ナデ.		
44	4b	弥生?	甕	胸部突帯	外面・器内:にぶい褐色7.5YR5/4. 内面:にぶい褐色7.5YR5/3.	粗砂:白色粒・金色の雲母. 細砂:透明粒・白色粒・黒色粒・金色の雲母.	4	外面:ヨコナデ. 内面:ナデ.		
45	4b		甕	胸部突帯	内外面:褐色5YR6/6. 器内:黄灰色2.5YR4/1.	粗砂:白色粒・石英・黒色粒・赤色粒. 細砂:白色粒・黒色粒・赤色粒・赤色粒.	3	外面:ヨコナデ. 内面:ナデ.		
46	4		甕?	胸部突帯	外面:灰褐色7.5YR5/2. 内面:にぶい褐色7.5YR6/4. 器内:褐色10YR5/1.	粗砂:白色粒・赤色粒・石英. 細砂:白色粒・黒色粒.	3	外面:ヨコナデ. 内面:ナデ.	外面スス付着.	
47	1	弥生	甕	胸部突帯	外面:にぶい褐色7.5YR5/4. 内面:にぶい褐色5YR6/4. 器内:明褐色7.5YR7/2.	礫:軽石. 細砂:白色粒・透明粒・黒色粒・赤色粒.	3	ナデ?	磨滅している	
48	4b	弥生	甕?	胸部突帯	外面:にぶい黄褐色10YR6/4. 剥落のため不明.	礫:軽石. 粗砂:白色粒. 細砂:白色粒・黒色粒.	3	外面:ヨコナデ.	外面スス付着.	
49	4b	弥生	高杯か古墳	杯部	外面:にぶい黄色2.5Y6/3. 内面:黒褐色2.5Y3/1. 器内:黄灰色2.5Y4/1.	粗砂:白色粒・石英・黒曜石. 細砂:白色粒・黒色粒.	3	外面:ヨコナデ. 内面:ハケ(一)→ナデ.		
50	4b		古墳	埴	外面:にぶい黄褐色10YR7/3. 外面赤色塗布部分:にぶい赤褐色5YR5/4. 内面:褐色10YR5/1.	細砂:黒色粒・白色粒・角閃石.	2	外面:ナデ?. 内面:横方向のナデ.	外面・底面赤色顔料塗布.	



PL.17 壺(29~36) 左:外面,右:内面



PL.18 突帯 (37~48)・高杯 (49)・埴 (50)

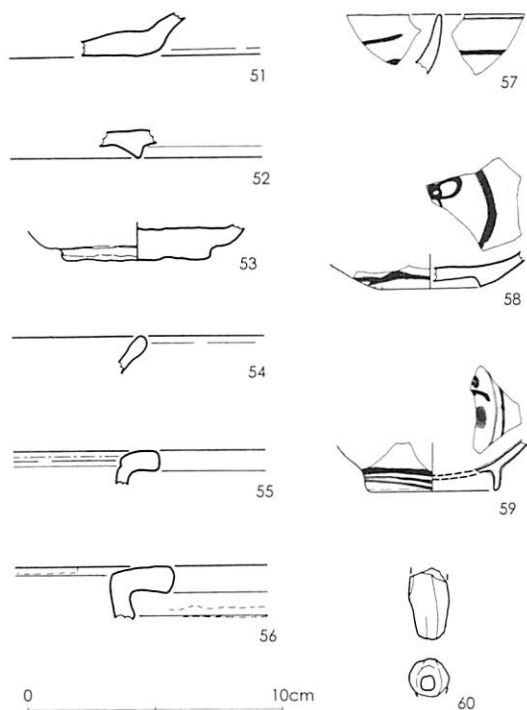
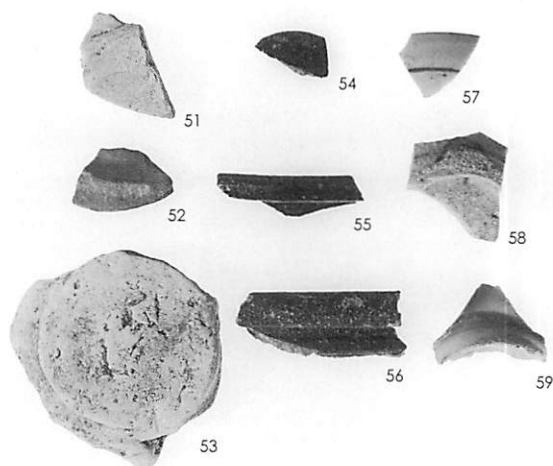


Fig.14 出土遺物 (3) (S=1/3)

Tab.5 出土遺物観察表 (3)



PL.19 土師器 (51~53)・陶磁器 (54~59) 上:外面, 下:内面



PL.20 土錘 (60)

No.	層	種類	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
						混和材	砂粒の 多さ		
51	3	土師器	杯	底部	内面・器内: 浅黄橙色7.5YR8/4. 外面: 橙色5YR6/6.	粗砂: 赤色粒.	細砂: 黒色粒・白色粒.	2	ナデ?. 外面赤色顔料塗布?
52	3	土師器	杯	底部	内外面: 鉄分付着のため不明. 器内: 橙色7.5YR6/6.	粗砂: 赤色粒.	細砂: 黒色粒・透明粒.	1	回転ナデ.
53	1	土師器	杯	底部	外面: 浅黄橙色10YR8/3. 内面・器内: 灰白色10YR8/2.	粗砂: 赤色粒.	細砂: 赤色粒・黒色粒.	1	外面・内面: 回転ナデ. 底面: ヘラきり→ナデ. 摩擦している.
54	2	陶器	不明	口縁部?	内外面施釉部分: 黒色7.5YR2/1. 無釉部分: 灰褐色7.5YR4/2.	粗砂: 白色粒.	砂粒: 白色粒.	1	施釉. 回転ナデ?.
55	1	陶器	鉢	口縁部	外面施釉部分: 7.5Y3/1オリブ黒. 無釉部・器内: 灰褐色5YR4/2.	粗砂: 白色粒.	細砂: 白色粒・透明粒・赤色粒.	2	口縁部上面: 釉ふき取り. 他: 施釉. 回転ナデ.
56	1	陶器	鉢?	口縁部	内外面施釉部分: 黒褐色2.5Y3/2. 無釉部分: にぶい赤褐色2.5YR4/3. 器内: 明赤褐色2.5YR5/6.	粗砂: 白色粒.	細砂: 黒色粒・白色粒.	2	口縁部上面: 釉ふき取り. 他: 施釉. 回転ナデ.
57	1	染付	椀	口縁部	施釉部分: 灰白色10Y7/1. 呉須: 緑灰色10G5/1. 磁胎: 灰白色N8/.	粗砂: 白色粒.	細砂: 白色粒.	1	施釉.
58	1	磁器	皿?	底部	施釉部分: 灰黄色2.5Y7/2. 呉須: 群青色. 磁胎: 灰白色5Y8/1.	粗砂: 白色粒.	細砂: 黒色粒.	1	高台内面: 無釉. 施釉部分貫入あり.
59	1	磁器	碗	底部	施釉部分: 明青灰色5BG7/1. 呉須: 群青色. 磁胎: 灰白色N8/.	粗砂: 白色粒.	細砂: 白色粒.	1	高台端部: 釉ふき取り.
60	2		土錘		内外面: にぶい黄褐色10YR7/3. 器内: 明褐色7.5YR5/6.	粗砂: 白色粒・黒色粒・赤色粒・石英・角閃石.	砂粒: 白色粒・黒色粒・赤色粒・石英・角閃石.	3	ナデ.

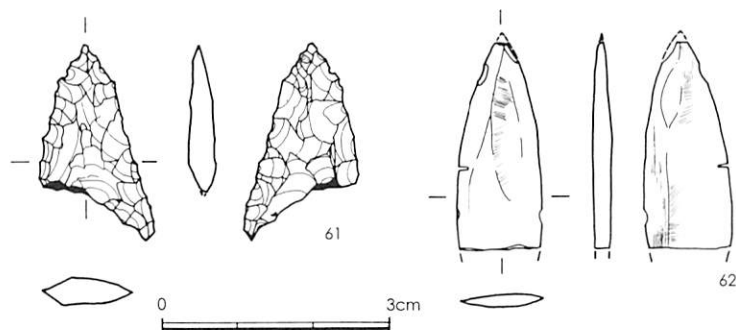


Fig. 15 石鏃 (S=1/1)

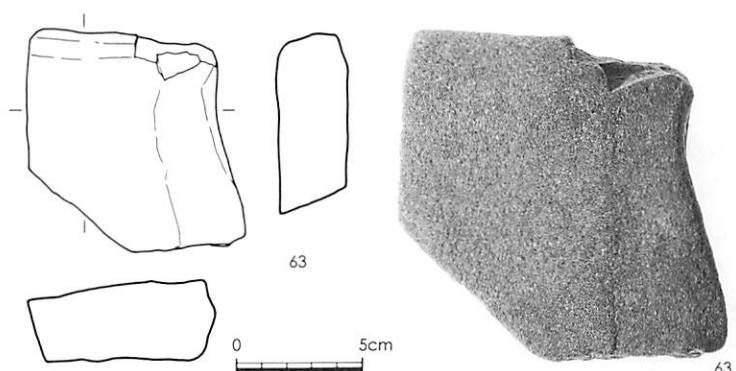


Fig. 16 擦り石 (S=1/3)

PL. 22 擦り石 (63)

は器壁も若干細く、長めの脚部である。

壺 (Fig. 13 29 ~ 36)

29 ~ 31 は口縁部の破片である。29 は反りながら外に開き、口唇部はヨコナデによって窪んでいる。頸部内面は表面が剥落している。

32 は胴部で、胴部最大径部分より上に1条の刻目目突帯が施されている。内面には、粘土帯接合線が認められ、そこを押えたユビオサエの痕が残っている。33 ~ 36 は底部の破片である。33・34 は少し平底が残るが、立ち上がりは明瞭ではない。35 は底面が厚く丸みを帯びている。36 は、粗雑なつくりで、内外面ともにあらい工具痕が認められる。

突帯 (Fig. 13 37 ~ 48)

突帯が付いている胴部片で、器種が判然としなかったものをここにまとめた。37 ~ 41 は複数突帯の胴部片である。断面三角形の突帯を2 ~ 3条施したものである。42 ~ 48 は1条突帯の胴部片である。42・44 は突帯直下で欠損しているため、あるいは複数突帯の一部かもしれない。43 は断面台形の低い突帯である。45 ~ 48 は刻目突帯である。刻目の断面は直線的であるため、刻みに使用した工具はヘラ状の硬く直線的な工具だと考えられる。

高杯 (Fig. 13 49)

49 は杯部の一部である。シャープに屈曲することから、中津野式か東原式の大きく外反する口縁部形態を



PL. 21 石鏃 左:表,右:裏

持つ高杯の破片だろうと推定できる。

埴 (Fig. 13 50)

50 は埴の底部である。外面には赤色顔料が添付されている。内面は調整が粗雑で表面の凹凸が著しい。

土師器 (Fig. 14 51 ~ 53)

51 は古代土師器杯の底部である。底面はヘラ切りで、外反気味に立ち上がる。52 は高台の破片で、高台は、断面三角形を呈し、小さい。53 は一見高台状の底部だが、底面は平底で厚く、ヘラ切りである。粗雑な調整である。

陶磁器 (Fig. 14 54 ~ 56)

54 ~ 56 はいわゆる黒薩摩の破片である。54 は口縁部で、端部は丸く仕上げている。55・56 は深鉢の口縁部で、端部が太いL字状を呈する。口縁部上面は釉をふき取っている。57 ~ 59 は染付けの破片である。57 は椀か皿の口縁部で、内湾気味に立ち上がる器形を呈する。58 は削り出しの高台を持つ底部である。高台内面は無釉である。59 は椀の底部である。

土錘 (Fig. 14 60)

60 は筒状の土錘だが、片方の端部が欠損している。胴部の中ほどで膨らむ形状を呈する。

石鏃 (Fig. 15 61・62)

61 は打製石鏃である。黒曜石製で、基部がえぐれている。また、その抉れた部分から基部の片方が欠損している。残存部のみで0.93 gを測る。62 は磨製石鏃である。下部は欠損しているため基部の形態は不明だが、扁平で鏑はない。ホルンフェルス製で、現状で0.94 gを測る。

擦り石 (Fig. 16)

62 は砂岩製で395gを測る。ひとつの面に平坦な擦り面を持つものだが、擦り面は右側にゆるく低い段を有している。段より左側は滑らかな平坦面だが、右側は表面があらわれている。その裏面と側面には顕著な擦り面は認められない。側面には、自然面と打ち欠いた面とがあるが、擦り面がその面の際までついていないことから、この大きさで使用していたものと考えられる。

Tab.6 層別遺物出土数

	弥生中期土器	弥生後期～古墳時代の土器	土師器	須恵器	土器	陶磁器	石器	土錘
1層	6	7	1		118	10		
2層					5	2		1
3層		1	3	3	38			
4a層		1			17			
4b層	6	16			181		1	
4c層	3				16		2	
4層		2			48			
SK1				1				
SK2					1			

2.7 まとめ

層について

本調査区では、近世から弥生時代中期までの遺物および遺構を確認した。各層の遺物出土状況から2層は近世、3層は古代、4層は古墳時代から弥生時代中期の時期の包含層であることが推定できる。また、4層は3つに分層でき、4C層は入来式と山ノ口式が出土し、弥生時代後期以降の出土遺物は出土していないことから、弥生時代中期の層である可能性が高い。弥生時代中期の遺物に関しては、郡元団地内でしばしば出土していたが、いずれも古墳時代遺物包含層に混在していた。また、古墳時代の住居跡が検出される部分が多かったため、古墳時代に住居を建てるのに伴ってもともとあった弥生時代の遺物包含層が攪乱されたと推定していた。本調査で初めて、弥生時代中期の遺物包含層が確認でき、溝状遺構もそれに伴うことから、弥生時代中期の時期にすでに居住などを目的とした人間活動が郡元団地内で行われていたことがわかってきた。

遺構について

遺構については、3層中より土坑状遺構が1基、4C層上面より土坑1基、5層上面より土坑1基、ピット群が検出された。3層中から検出したSK1は3層上面から掘り込まれていた可能性が高く、埋土が2層土を含んでいることから、近世のものであると考えられる。調査区の壁際で検出されたため、全形の1/4程度しかわからないが、平面は径1mの円形を呈するものと考えられる。断面形態など類似する遺構としては、平成元年度に発掘調査を実施した郡元団地F-3・4区(大学院連合農学研究科棟)で検出された円形の土坑がある¹⁾。

4C層上面で検出された遺構はSK2だが、これはピット状で、他のピットの中にも検出面は5C層上面だが、埋土がSK2に類似するものがあるため、4C層上面にいくつかのピットがあったものと考えられる。ただし、配列などは不明である。遺構内からの出土遺物がほとんどないため、それぞれの時期は不明だが、直上の4b層

が弥生時代中期から古墳時代の包含層であるため、この時期幅で考えた

い。
5層上面で検出した遺構は、SK3とSD1、それからピットである。どの遺構からも遺物は出土していない。埋土が4C層に類似していることなど

から、弥生時代中期頃と推定できる。これらの遺構に関連性があるかどうかは不明である。

遺物について

遺物は、弥生時代中期の入来式、山ノ口式、後期の高付式、中津野式、古墳時代後半期の笹貫式の土器、土師器、陶磁器、土錘、磨製石鏃、打製石鏃、擦り石が出土している。ほとんど小片で、包含層中より散発的に出土するため、近くで使用されていたものが廃棄され、流れ込んだと考えられる。

これらの遺物のうち、入来式・山ノ口式の土器片の胎土に金色の雲母が混入しているものがある。中期の土器片であると考えられるものの半分以上を占める。もともと、郡元団地内から出土する遺物には胎土に金色の雲母が混入されているものは少ない。金色の雲母が混入された土器はこの遺跡内では作っていないと仮定すると、本遺跡から出土する中期土器のほとんどが他地域から持ち込まれた搬入品であるということになる。

また、山ノ口式は大隅半島と薩摩半島東部を中心として分布する土器様式だが、他の土器様式に比べて金色の雲母が混入しているものが多い。「山ノ口式土器」として、金色の雲母を混入することが重要な要素であると、当時の人々に認識されていたとすれば、地元近くで取れる砂粒や粘土にはない金色の雲母をわざわざ入手して作成したということも考えられる。

詳細な胎土分析の必要があるだろうが、これが明らかになれば地域間交流や、日常生活道具である土器についての当時の人々の趣向性を知る上で、重要な資料であるといえる。今後、この土器についての多角的な胎土分析を行っていく予定である。

註

- 1) 松永幸男・砂田光紀 「第3章 鹿児島大学郡元団地F-3・4区(大学院連合農学研究科校舎建設予定地)における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報V』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1990

3 郡元団地 K-9 区(総合研究棟II建設予定地)における試掘調査報告

3.1 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地内に総合研究棟(理工系)¹⁾の建設が計画され、理学部西側のサークル棟跡地がその予定地とされた。本地点周辺の過去の発掘調査としては、昭和60年に理学部1号館増築に伴う発掘調査が行われており、古墳時代の住居址が密集して検出されている。また、平成9年の工学部大学院校舎建設に伴う発掘調査においては、中世から縄文時代にわたる遺物包含層、および弥生時代の水田の可能性が高い遺構を確認している。これらのことから、本地点においても埋蔵文化財が包蔵されていることが推定された。そのため、埋蔵文化財調査室では遺構および遺物包含層の有無を確認するため、試掘調査を行うことになった。

3.2 調査の体制

発掘調査は以下の体制で行った。



PL.23 掘削開始の様子

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
 室長 新田栄治
 調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
 室員 寒川朋枝
 調査作業員 谷口ノリ・松下ミチ・西庄司・粒崎幸造・脇ツルエ・脇俊子

3.3 調査の経過

調査は平成14年3月13日～26日にかけて実施した。総合研究棟建設予定地南側に2×2mのトレンチを設定した(Fig.1)。

トレンチ南側半分は、配管埋設のため約2mの深さまでほぼ垂直に掘り込まれており、攪乱層であった。北側1m幅を地表下1.3mまで掘り下げたところ、古墳時代の遺物包含層である8層に達した。遺物は小片6点のみにとどまる。さらに、地表下1.6mで露出する12層は水田層と考えられる層で、その上面では稲株跡かと思われる小ピット群を検出し、13層上面ではトレンチ北西部に、長径約20～30cm、短径約20cmの楕円状の浅い窪みを3基検出した。13層上面の遺構を検出した時点で下層の層位確認のためトレンチ北西部を残し、北東部約70cm四方をさらに掘り下げた。地表下2.4mの深さで、地山である砂層上面が確認できた。この時点で層位断面図を作成し、プラント・オパール分析等のための土壌のサンプリングを行い、埋め戻しを行って調査を終了した。

3.4 層位 (Fig.17)

- 1層 表土層、客土等を一括した。
- 2層 黒褐色 10YR3/2 シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。1 cm 大までのパミスを少量含む。鉄分が薄くまだらに混ざる。
- 3層 黒褐色 7.5YR3/2 シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。1 cm 大までのパミスを少量含む。暗褐色 10YR3/3 の鉄分を筋状に含む。
- 4層 黒褐色 7.5YR3/2 シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。3層に比べや

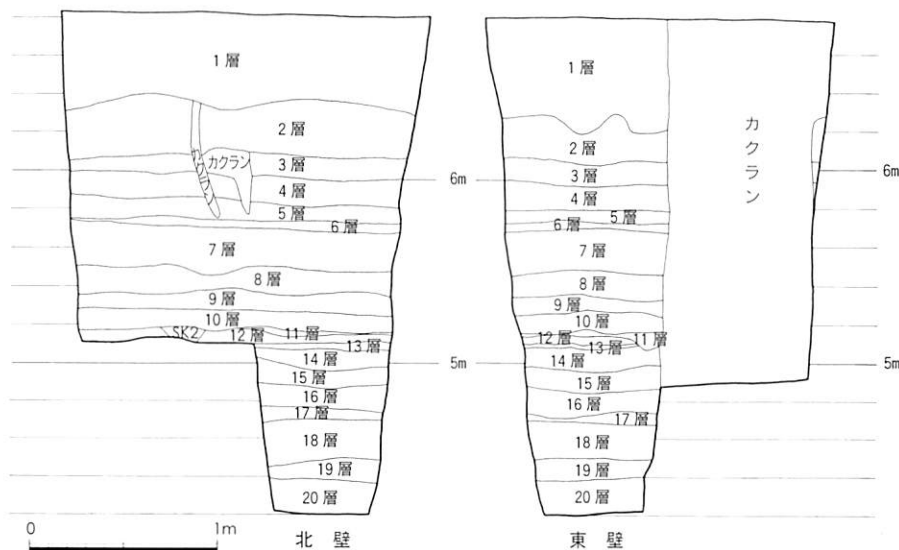


Fig.17 層位断面図(S=1/40)

や色調は明るい。1cm 大までのパミスを含む。鉄分の密度は 3・4 層が最も高い。

- 5層 黒褐色 10YR3/2 シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。1cm 大までのパミスを含む。黒褐色 7.5YR3/2 の鉄分を含む。
- 6層 灰褐色 7.5YR4/2 シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。1cm 大までもパミス含む。黒褐色 7.5YR3/2 の鉄分を含む。
- 7層 灰褐色 7.5YR4/2 シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。1cm 大までのパミスを少量含む。鉄分を少量含む。
- 8層 褐灰色 7.5YR4/1 シルト質砂。やや粘性をおび、しまっている。上層部に黒褐色 10YR3/2 の鉄分を含む。成川式土器の小片を含む。
- 9層 灰褐色 7.5YR4/2 シルト質砂。粘性は強く、しまっている。鉄分を少量含む。
- 10層 褐灰色 7.5YR4/1 シルト質砂。粘性を帯び、しまっている。鉄分を少量含む。
- 11層 灰褐色 7.5YR4/2 シルト質砂。粘性を帯び、しまっている。
- 12層 東側は、にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト。粘性は強く、しまっている。鉄分を含む。西側は、色調がやや暗くなり、灰黄褐色 10YR4/2 シルト。鉄分は少ない。特に、鋤跡の可能性が考えられる SK 2 の断面は黒褐色 10YR3/2, 7.5YR3/1 シルトのブロックがまだらに混ざる。鉄分は少ない。
- 13層 黒褐色 5YR2/1 シルト。やや粘性を帯び、しまっている。極少量鉄分を含む。断面をみると、13層上面は凹凸が見られる。



PL.24 北壁層位

- 14層 黒褐色 7.5YR3/1 シルト。粘性を帯び、しまっている。鉄分を少量含む。
- 15層 黒褐色 5YR3/1 シルト。粘性を帯び、しまっている。極少量鉄分を含む。
- 16層 黒色 10YR2/1 シルト。粘性を帯び、しまっており固い。15層との境に鉄分が含まれる。
- 17層 黒褐色

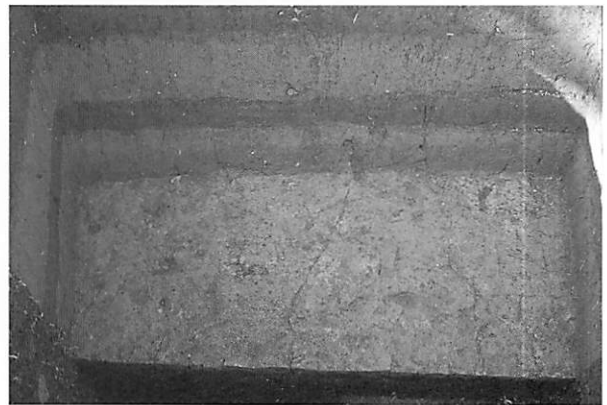
10YR3/2 粗砂。しまっている。下部に鉄分が少量含まれる。

- 18層 黒色 N2/泥炭層。部分的にしまっており、木の皮や葉が多く含まれる。
- 19層 黒褐色 5YR2/1 シルト。粘性は帯びず、しまっている。泥炭層土が少量混ざる。2, 3 cm 大の軽石礫が混ざる。特に上部にはまとまって含まれる。
- 20層 黒褐色 7.5YR2/2 粗砂混じりシルト。

3.5 遺構と遺物

遺構

遺構は、12層上面、13層上面で確認した。12層上面では、径4～5 cm のピットが5つ検出された (Fig.18)。12層は、1997 年度に実施した郡元団地 J・K-10・11 区の発掘調査で水田層の可能性が高いとされた9層と同一層と考えられ、9層上面からも類似する直径5 cm, 深さ3～7cm のピットが確認されている。これらは、水田遺構でよく確認される稲株痕と呼ばれる遺構に類似し



PL.25 12層上面ピット検出状況

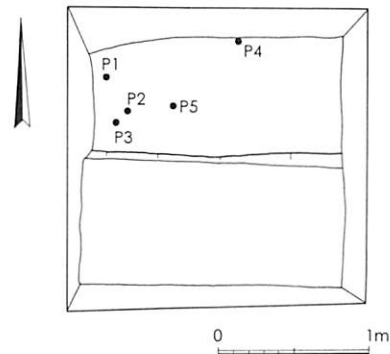


Fig.18 12層上面検出ピット配置図 (S=1/50)



PL.26 13層上面検出 SK1～3 左：検出状況, 右：SK1 完掘状況

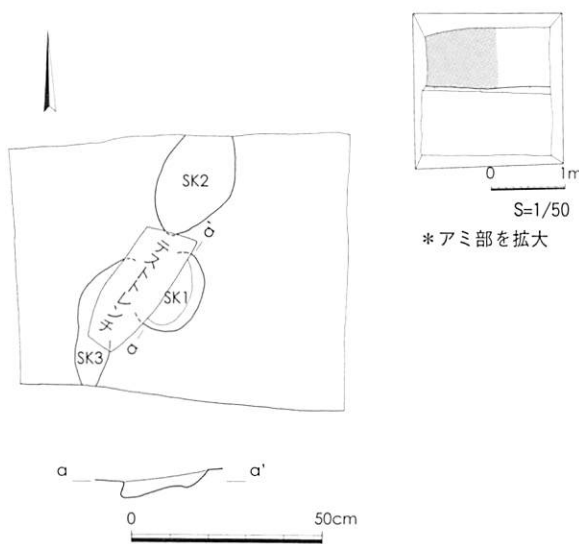


Fig.19 SK1～3 (S=1/20)

ているが、今回の調査では検出密度が低く、並びも見出せない状態であった。

13層上面では、短径約20cm、長径約20～30cmの楕円状の浅い窪みが3基検出された (Fig.19)。これらの窪みは北東-南西の方角に並んでおり、その窪みを境として西側で13層上面の著しい凹凸がみられた。こうしたことから、これらの浅い窪みは小畦を作る際の鋤跡である可能性が考えられる。このうちSK1のみを完掘した。埋土は灰黄褐色 10YR6/2 シルトを主体とし、黒褐色 10YR3/1 シルトがブロック状に混ざる。粘性は強く、しまっている。断面は、南側へやや傾斜するように

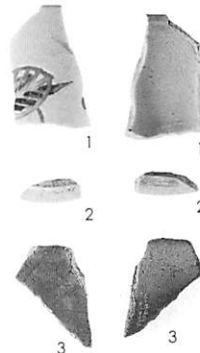
Tab.8 出土遺物観察表

No.	層	種別	器種	部位	色調・釉調	胎土	砂粒の多さ	調整・文様	備考
1	2	陶磁器		口縁部	外面・内面：灰白色10Y8/1, 器肉：灰白色5Y8/1	白色	0	施釉	
2	2	土師器	高台	脚部	外面・内面・器肉：にぶい橙褐色5YR7/4	微細な黒色粒・白色粒をわずかに含む	1	回転ナデ	磨滅している
3	8	土器	甕	口縁部	外面：にぶい褐色7.5YR5/3, 内面：にぶい黄褐色10YR7/2, 器肉：褐灰色10YR5/1	細砂粒・砂粒：赤色粒、黒色粒、白色粒、石英 礫：黒色礫をわずかに含む	3	外面：ヨコナデ	煤付着

深くなっているが、最深部は4cm程である。

包含層出土遺物

総出土遺物数は27点であった。層別出土状況はTab.7に示す。その中から、Fig.20に実測したものを示した。



PL.27 出土遺物 (左：外面, 右：内面)

Tab.7 層別遺物出土状況

層	陶磁器	土器	古墳時代の土器
2		2	
3		1	14
4			4
8		5	1

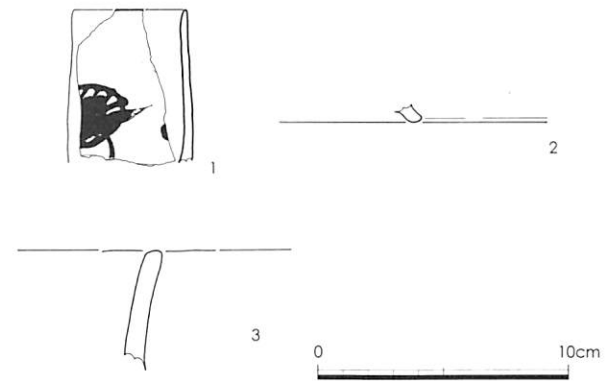


Fig.20 出土遺物 (S=1/3)

3 郡元団地 K-9 区(総合研究棟 II 建設予定地)における試掘調査報告

1 は 3 層出土の磁器である。2 は 3 層出土の土師器であり、高台の端部と思われる。3 は 8 層出土の古墳時代の甕の口縁部で、広口でやや外開きに直立すると思われる。

3.6 試掘調査の結果

試掘調査の結果、調査区付近では上部に中近世のものと考えられる水田層や遺物包含層が複数枚広がり、その下に古墳時代の包含層、さらにその下には弥生時代の水田跡と推定される層が確認できた。しかし、古墳時代包含層において遺構は検出されず、今までの調査から想定されていたように、古墳時代の住居群の範囲は本調査区付近には及ばないと考えられる。平成 14 年度より開始される本調査（郡元団地 J・K-9 区 理工学部総合研究棟建設予定地）において、建設予定地の北東部に広がっている住居群の範囲がより明らかになると思われる。

註

- 1) 郡元団地 I・J-4 区に文系総合研究棟があるため、本調査区付近に建設予定の理工系総合研究棟を便宜的に総合研究棟 II と呼称した。

4 平成13年度(2001年4月～2002年3月)の立会調査

2001-A 情報ネットワーク設備工事に伴う立会調査
 調査地点 工学部機械工学科1号棟北西部(郡元団地I・J-12・13区)
 調査期間 2001年6月11日

工学部機械工学科1号棟の配管工事に伴う立会調査を行なった。1号棟の北西部に約70cm程度の深さの掘削が行なわれたので、その部分について調査を行なった(Fig.21)。土層の水平堆積状況から、水田層であると判断されたが、遺物の出土はなかった。

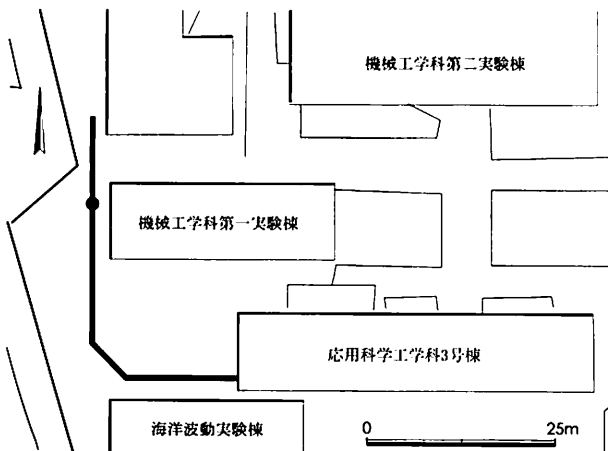


Fig.21 郡元団地I・J-12・13区(S=1/1000)

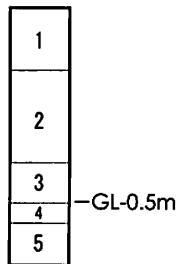


Fig.22 I・J-12・13区
土層柱状図

- 1層 層位は、5枚確認された(Fig.22)。1層 表土・客土。
- 2層 水田層。灰褐色シルト質砂。鉄分が浸透し、白いパミス粒子を含む。
- 3層 水田層。暗灰褐色シルト質砂。鉄分が浸透し、白いパミス粒子を含む。
- 4層 (水田層。暗灰褐色シルト質砂。鉄分が浸透し、白いパミス粒子を含む。
- 5層 (水田層。灰白色シルト質砂。鉄分が浸透し、白いパミス粒子を含む。

2001-B 総合研究棟新営その他電気設備工事に伴う立会調査
 調査地点 総合研究棟周辺(郡元団地J・K-3・4区)
 調査期間 2001年8月6日～24日, 9月3日

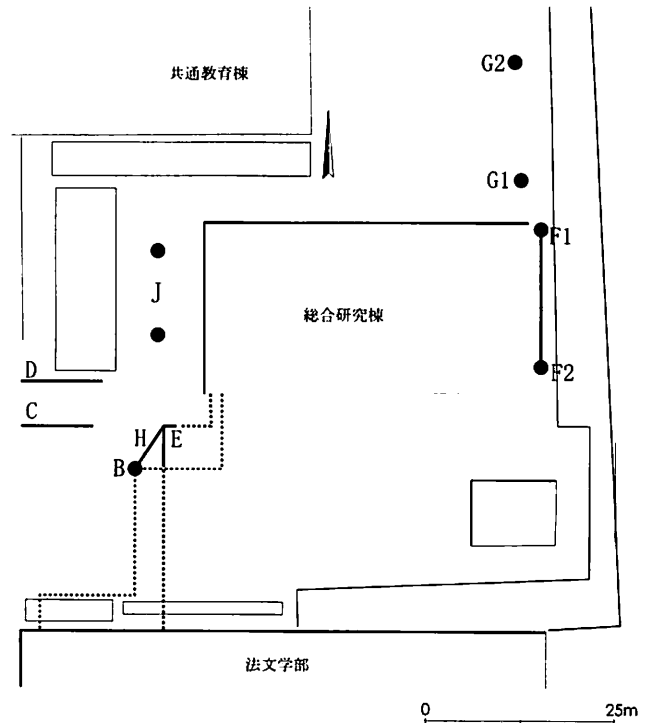


Fig.23 郡元団地J・K-3・4区(S=1/1000)

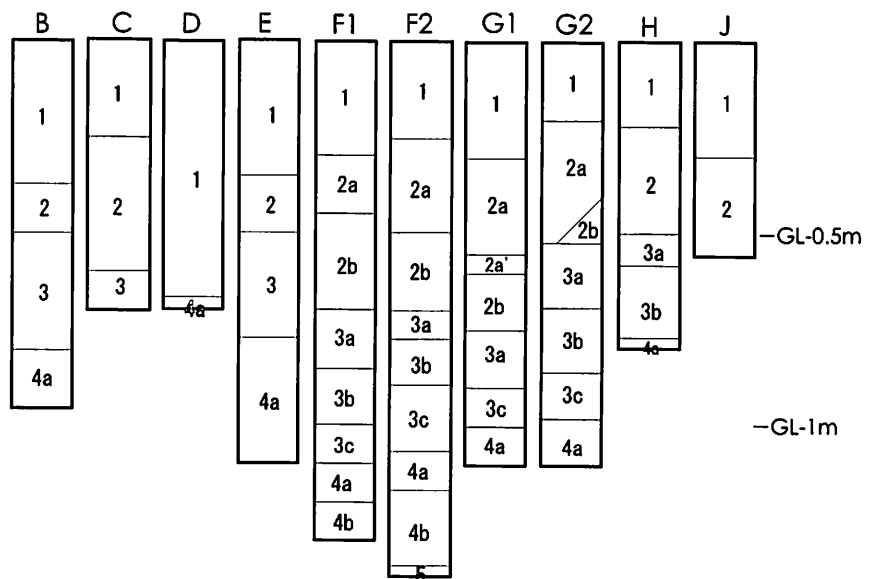


Fig.24 J・K-3・4区土層柱状図

総合研究棟建設後の周辺設備工事に伴う立会調査が行われた(Fig. 23・24)。各地点の2層以下は対応関係にあり、広く同層序を呈するものと考えられる。以下、各地点ごとに説明する。

A 地点は、総合研究棟の南西部と法文学部棟の間に設けられた配管工事地点であるが、法文学部橋本達也氏(現・総合研究博物館)によって、遺物包含層が掘削されていたとの連絡があった。調査室員が現場に駆けつけた際には既に埋め戻されていたため、層序などの確認は行っていない。

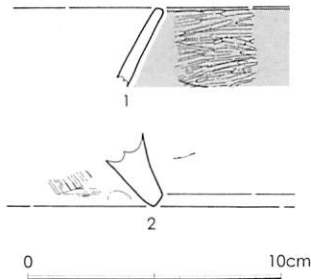
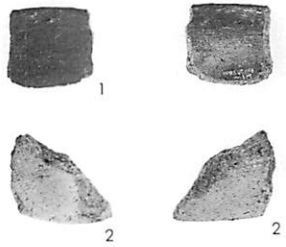


Fig. 25 B地点出土土器(S=1/3)



PL. 28 B地点出土土器

甕脚部(2)が出土している(Fig. 25, PL. 28, Tab. 9)。

C 地点

- 1層 表土・客土。
- 2層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。
- 3層 中近世の水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂。
- 4a層 古墳時代の包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。上面には古墳時代以降の遺物集積遺構が確認される。すべて土器細片であり、図化できるものはない。

Tab. 9 2001-B B地点出土土器観察

No.	地点・層	種別	器種	部位	色 調	混 和 材	混和材の 多 少	調 整	備 考
1	B・5a層	笹貫式	高坏か埴	口縁部	外面:橙5YR7/6. 内面・器内:にぶい黄橙10YR7/2.	粗砂:石英, 砂:石英, 細砂:黒色粒・石英.	3	外面:(-)磨き, 内面:(-)ナデ.	外面~内面上端まで丹塗り.
2	B・5a層	笹貫式	甕	脚部	外面上・器内:橙2.5YR6/8. 外面下・内面:にぶい黄橙10YR7/3.	礫:石英, 粗砂:石英, 砂:石英, 細砂:黒色粒・石英.	4	外面:(-)ナデ, 内面(\\)刷毛目→(?)ナデ.	

B 地点

- 1層 表土・客土。
- 2層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。
- 3層 中近世の水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂。
- 4a層 古墳時代の包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。上面には古墳時代以降と考えられる遺物集積遺構が確認される。いずれも小破片が4a層上面に張り付くようにして出土している。古墳時代の土器が数点出土している。高坏か埴の口縁部(1)と甕脚部(2)が出土している(Fig. 25, PL. 28, Tab. 9)。

D 地点

- 1層 表土・客土。
- 4a層 古墳時代の包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。上面には古墳時代以降の遺物集積遺構が確認される。すべて土器細片であり、図化できるものはない。

E 地点 (Fig. 26)

E地点では、配管工事に伴う、深さ約110cm前後の掘削が行われたため、立会調査を行なった。4a層上面からは、総合研究棟発掘の際に検出された遺物集積遺構の縁辺と見られる小破片が上面に貼り付いた状況が確認された。4b層上面においては、古墳時代の住居

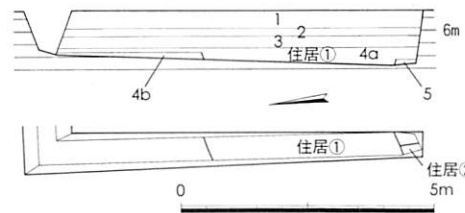


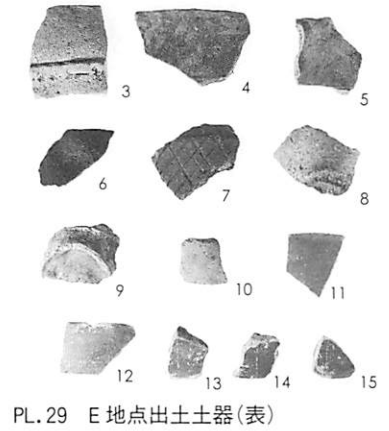
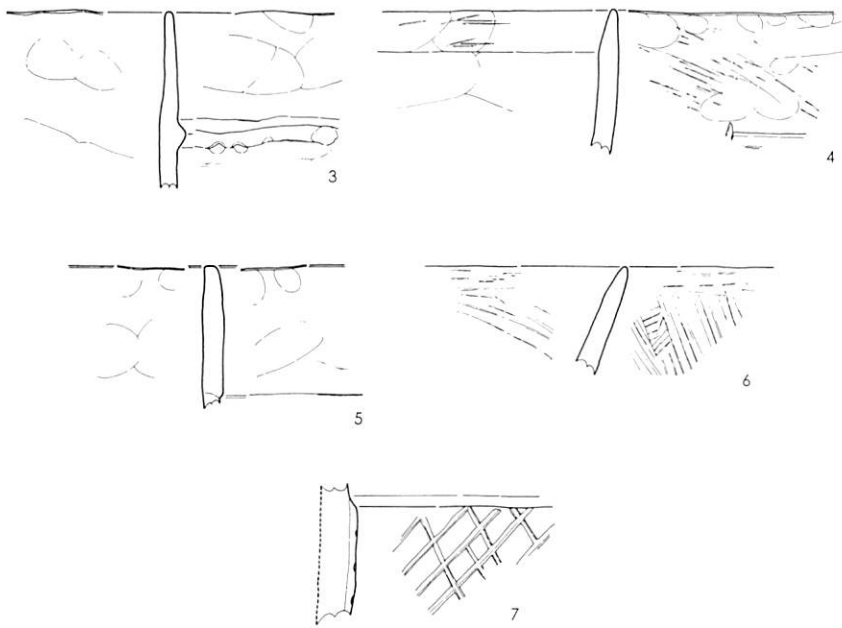
Fig. 26 E地点遺構(S=1/30)

跡が2軒切り合っている状況が確認された。そのため、写真撮影、平板実測、土層観察メモなどを行なって、調査を終了した。この地点は、住居跡群の周辺地区であることなどが確認されたので、今後の対応には慎重を要す地点である。出土遺物は多量に出土し、古墳時代後半の遺物と考えられる。遺物は4a層上面から4b層のどちらか、また、どの住居に伴うかの確認はできなかった。遺物は比較的少量に出土。古墳時代の甕(3~5・8~10)、大壺(7)、高坏・鉢・埴(6・11~15)などが出土している(Fig. 27, PL. 29・30, Tab. 10)。

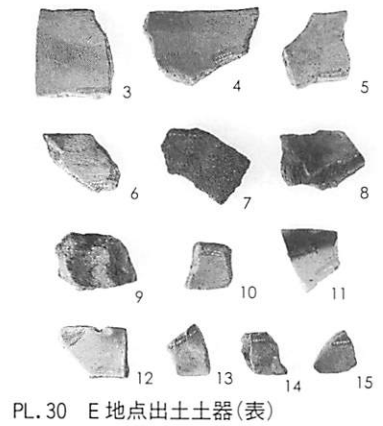
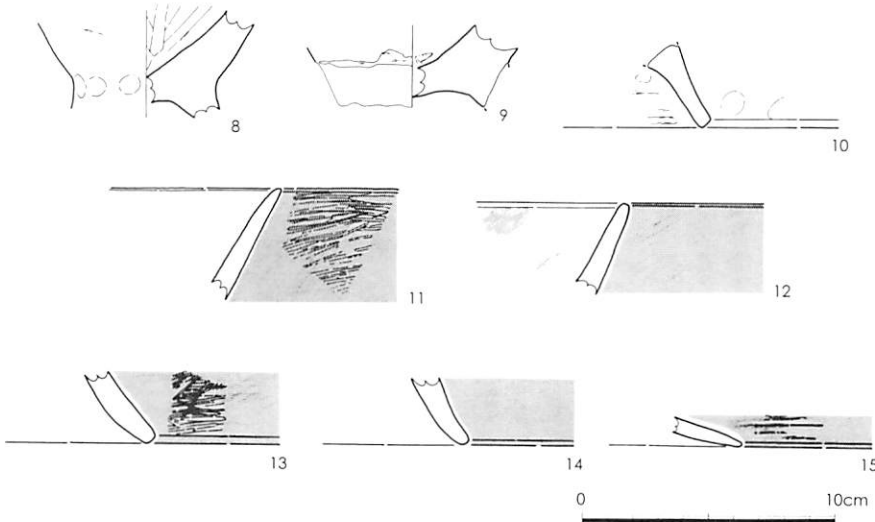
- 1層 表土・客土。
- 2層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。
- 3層 中近世の水田層。にぶい黄褐色(10YR5/1)シルト質砂。
- 4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。
- 4b層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)砂質シルト。

F1 地点

- 1層 表土・客土。
- 2a層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。小さなパミスを多く含む。



PL. 29 E地点出土土器(表)



PL. 30 E地点出土土器(表)

Fig. 27 E地点出土土器(S=1/3)

- 2b層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。小さなパミスを多く含む。
- 3a層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。パミス含む。
- 3b層 中近世水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3に類似)シルト質砂。パミス混じり。
- 3c層 中近世水田層。黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。パミス混じり。
- 4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。ほとんど混ざり物なし。
- 4b層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)砂質シルト。ほとんど混ざり物なし。

F2地点

- 1層 表土・客土。

- 2a層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。小さなパミスを多く含む。
- 2b層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。小さなパミスを多く含む。
- 3a層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。パミス含む。
- 3b層 中近世水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3に類似)シルト質砂。パミス混じり。
- 3c層 中近世水田層。黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。パミス混じり。
- 4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。ほとんど混ざり物なし。
- 4b層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)砂質シルト。ほとんど混ざり物なし。

Tab.10 E地点出土土器観察

No.	地点・層	種別	器種	部位	色調	混和材	混和材の 多さ	調整	備考
3	E・4層	笹貫式	甕	口縁部 (突唇文)	外面:にぶい褐7.5YR5/4.内面:にぶい橙7.5YR6/4.器内:にぶい黄橙10YR6/3.	礫:赤色粒.粗砂:石英・角閃石・赤色粒.砂:石英・角閃石.細砂:角閃石・石英.	5	内外面:(?)ナデ・指頭圧痕.	
4	E・4層	笹貫式?	甕	口縁部	外面:にぶい褐7.5YR5/4.内面:にぶい橙5YR6/4.器内:にぶい赤褐5YR5/4.	礫:白色粒.粗砂:石英・角閃石.砂:角閃石・石英.細砂:石英・角閃石.	4	外面上部:(-)ナデ.外面下部:(\) 刷毛目→(?)ナデ・指頭圧痕.内面:(-)ナデ・指頭圧痕.	
5	E・4層	笹貫式	甕	口縁部	外面:にぶい黄橙10YR7/4.内面:黄灰2.5Y7/2.器内:黄灰2.5Y6/1.	礫:白色粒.粗砂:石英.砂:角閃石・石英.細砂:石英・角閃石.	3	外面:(?)ナデ・指頭圧痕.内面:(?)ナ デ・指頭圧痕.	口縁部と胴部 の接合痕明瞭.
6	E・4層	笹貫式?	鉢か高 坏	口縁部	外面:褐灰10YR4/1.内面:にぶい黄褐10YR7/3.器内:灰5Y5/1.	粗砂:石英.砂:角閃石・石英.細砂:石英・角閃石.	2	外面上端:(-)刷毛目→(?)ナデ.外 面下部:(/)刷毛目→(-)刷毛目→ (?)ナデ.内面(-)刷毛目→(?)ナデ.	
7	E・4層	笹貫式	壺	幅広突 帯部	外面:灰褐7.5YR4/2.内面:褐灰7.5YR4/1.	礫:白色粒.砂:石英・赤色粒.	6	外面:(-)刷毛目→(-)ナデ.	
8	E・4層	笹貫式	甕	脚部	外面:にぶい橙5YR7/3.内面:灰白2.5Y8/2.器内:黄灰2.5Y4/1.	粗砂:石英・角閃石・赤色粒.砂:石英・角閃石.細砂:石英・角閃石.	6	外面:(-)ナデ.内面:()刷毛目→ (?)ナデ.内底面:(?)ナデ.	
9	E・4層	笹貫式	甕	脚部	外面:にぶい黄橙10YR7/4.内面:にぶい橙10YR6/3.脚台内:にぶい黄橙10YR6/3.	礫:白色粒・灰色粒.粗砂:石英・角閃石・白色粒.砂:石英・角閃石.細砂:石英・角閃石.	6	内面:(?)ナデ.内底面:(-)ナデ.	脚接合部で脚 台が外れる
10	E・5層	笹貫式	甕	脚部	外面上:橙2.5YR6/8.外面下:にぶい黄橙210YR7/3.内面:橙5YR6/6.	礫:白色粒・角閃石.粗砂:石英・角閃石.砂:石英・角閃石.細砂:石英・角閃石.	2	内外面:(-)ナデ.	脚接合部で脚 台が外れる
11	E・4層	笹貫式	高坏か 埴	口縁部	外面:赤10R5/6.内面:にぶい黄橙10YR7/3.器内:にぶい黄橙10YR7/2.黒斑:暗灰N3/1.	礫:赤色粒・石英.粗砂:赤色粒・石英.砂:赤色粒・石英.細砂:赤色粒・石英.	2	外面:(-)ヘラ磨き.内面:(?)ナデ.	外面丹塗り.
12	E・4層	笹貫式	高坏か 埴	口縁部	外面:浅黄橙7.5YR8/4.内面:灰白10YR8/2(一部は器内と同色).器内:黄灰2.5Y6/1.丹:赤褐2.5YR4/8.	砂:石英・角閃石.細砂:石英・角閃石.	2	外面:(?)ヘラ磨き.内面:(-)ナデ.	丹塗りが口縁 部内上端に 及ぶ.
13	E・4層	笹貫式	高坏	脚部	内外面:にぶい黄橙10YR7/4.器内:黄灰2.5Y5/1.丹:明赤褐2.5YR5/6.	細砂:白色粒・石英?	2	外面:(-)ヘラ磨き.内面:(?)ナデ.	外面丹塗り.
14	E・4層	笹貫式	高坏	脚部	内外面:にぶい橙7.5YR7/4.器内:灰N5/丹:2.5YR4/6.	礫:白色粒・石英.粗砂:石英.砂:石英.細砂:石英?	2	外面:(?)ヘラ磨き.内面:()ナデ.	外面丹塗り.
15	E・4層	笹貫式	高坏	脚部	外面:浅黄橙7.5YR8/3.内面:黄灰2.5Y6/1.器内:浅黄橙10YR8/4.	砂:石英・白色粒.細砂:石英・白色粒.	2	外面:(-)ヘラ磨き.内面:(-)ナデ.	外面丹塗り.

5層 無遺物層。にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂。

G1 地点

1層 表土・客土。

2a層 近代以降の水田層。磁器出土。灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。小さなパミスを多く含む。

2a'層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR4/2)に類似)砂質シルト。

2b層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。小さなパミスを多く含む。

3a層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。パミス含む。

3c層 中近世水田層。黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。パミス混じり。

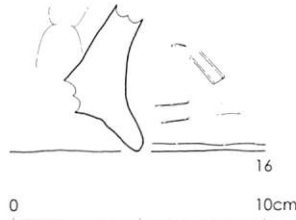
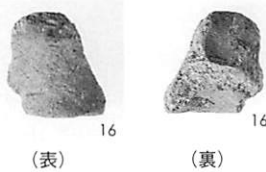


Fig. 28 G1地点出土土器 (S=1/3)



PL. 31 G1地点出土土器

4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR3/2)砂質シルト。上面より数点の土器が出土している。古墳時代以降の遺物集積遺構の縁辺部であると考えられる。(16)は、古墳時代の甕脚部である(Fig. 28, PL. 31, Tab. 11)。

G2 地点

1層 表土・客土。

2a層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。小さなパミスを多く含む。

2b層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。小さなパミスを多く含む。

3a層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。パミス含む。

3b層 中近世水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3)に類似)シルト質砂。パミス混じり。

3c層 中近世水田層。黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。パミス混じり。

4a層 古墳時代遺物包含層。土器比較的多量に出土したが図化できるものはなかった。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。

H 地点

1層 表土・客土

Tab. 11 2001-B G1 地点出土土器観察

No.	地点・層	種別	器種	部位	色調	混和材	混和材の 多さ	調整	備考
16	G・4層	笹貫式	甕	脚部	外面:にぶい黄橙10YR7/3.内面:にぶい橙7.5YR7/4.	礫:白色粒.粗砂:白色粒・石英.砂:白色粒・石英.細砂:白色粒・石英・黒色粒.	4	内外面:(\) 刷毛目→()ナデ.	

Tab.12 2001-B H地点出土土器観察表

No.	地点・層	種別	器種	部位	色調	混和材	混和材の 多さ	調整	備考
17	H・4層	甕貫式	甕	口縁部	外面:にぶい褐7.5YR5/4.内面:橙7.5YR7/6.器内:黄灰2.5Y6/1.	粗砂:石英.砂:石英.細砂:黒色粒・石英.	2	外面:(-)刷毛目→(?)ナデ.内面:(?)ナデ.	
18	H・4層	甕貫式	甕	口縁部	外面:黄灰2.5Y6/1.内面:にぶい黄橙10YR7/3.器内:暗灰N3/.	粗砂:石英.砂:石英.細砂:黒色粒・石英.	2	内外面:(-)刷毛目→(-)丁寧なナデ.	口縁部は歪みで波状を呈す.
19	H・4層	甕貫式	高坏	坏部	外面:橙7.5YR7/6.内面:器内:橙5YR6/6.	細砂:石英.	1	外面:外面上部(-)ナデ.口縁部~胴部(-)刷毛目.内面:(-)刷毛目→(-)丁寧なナデ.	

2層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。

3a層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。パミス含む。

3b層 中近世水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3)に類似シルト質砂。パミス混じり。

4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR3/2)砂質シルト。上面より比較的多くの土器が出土している。古墳時代以降の遺物集積遺構の縁辺部であると考えられる。甕(17・18)、高坏(19)が出土している(Fig.29, PL.32, Tab.12)。

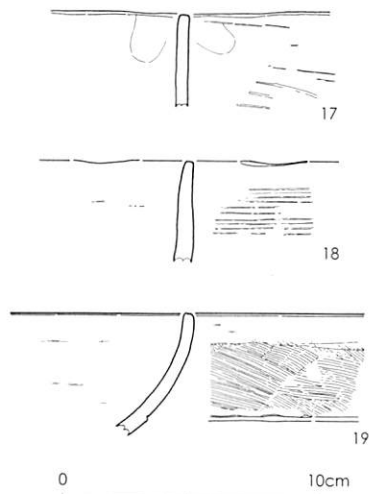
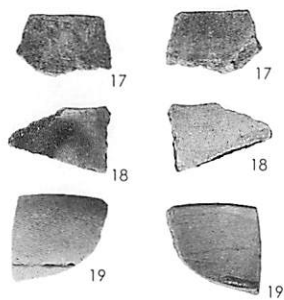


Fig.29 H地点出土土器(S=1/3)



(表) (裏)
PL.32 H地点出土土器

J地点

1層 表土・客土。
2層 近代以降の水田層。褐灰色(10YR5/1)砂質シルト。I・J地点では、掘削穴が浅く、遺物包含層に影響はなかったため、メモと写真撮影を行なって調査を終了した。

2001-C 医学部 RI 施設配管工事に伴う立会調査

調査地点 医学部 RI 施設内(桜ヶ丘団地 H-8 区)

調査期間 2001年8月20日

医学部 RI 施設内において、配管工事のための立会調査を行なった。旧地形が北から南へと傾斜していることが確認されているので、東側の RI 施設に向かう道路

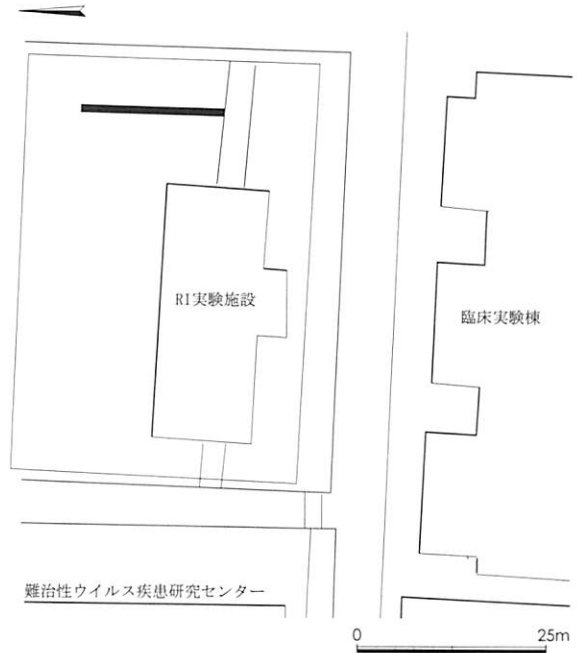


Fig.30 桜ヶ丘団地 H-8 区(S=1/1000)

部分から南北方向に、深さ1m程度のトレンチを重機で掘削した(Fig.30)。その結果、表土・攪乱層とその下に桜島薩摩テフラを確認でき、その上部に存在する包含層は全て削平されたものと判断した。遺物などは出土していない。本施設内の遺物包含層の残存状況は極めて悪い。

層位は、2枚確認された(Fig.31)。
1層 表土・客土。
2層 桜島薩摩テフラ。褐色(10YR8/6)パミス層。

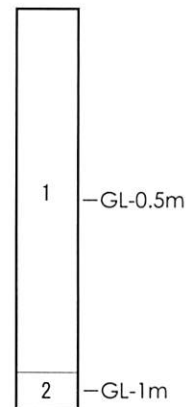


Fig.31
H-8区土層柱状図

2001-D 医学部保健学科新営その他工事に伴う立会調査

調査地点 医学部医療技術短期大学部前・グランド南東隅移植先(桜ヶ丘団地 I-9・K-8 区)

調査期間 2001年8月22・23日

医学部保健学科前の花壇部分にある污水管切廻し工事と桜2本の移植とが並行して行なわれ、それに伴う調査を実施した(Fig.32・33)。

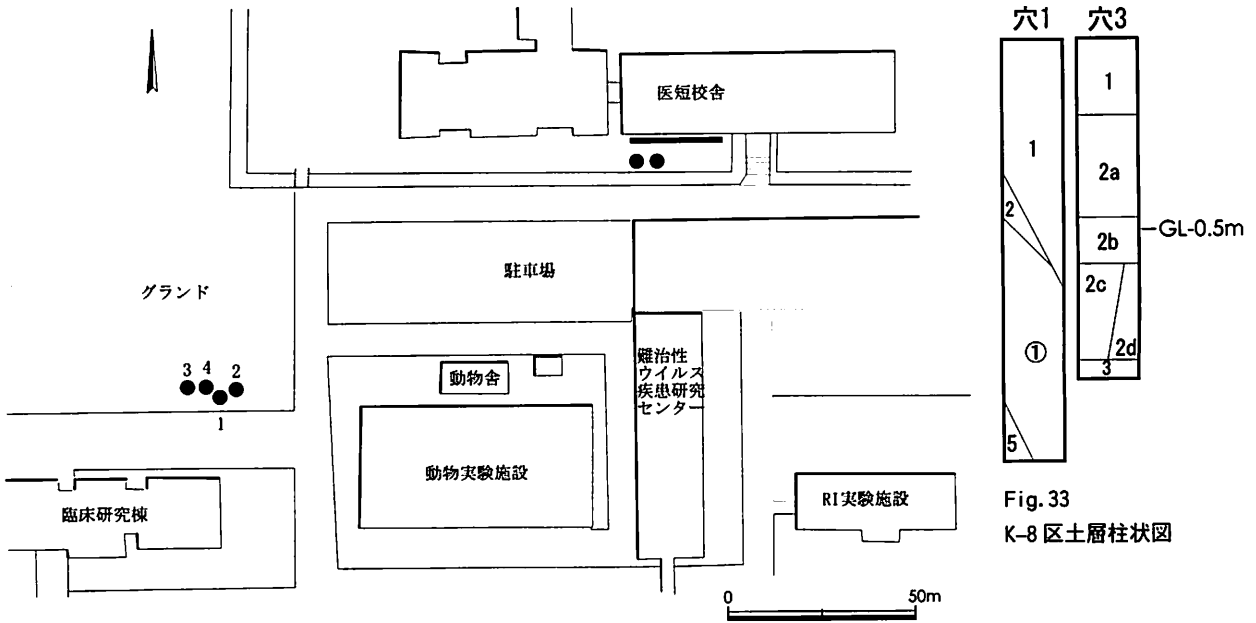


Fig. 32 桜ヶ丘団地 1-9, K-8 区 (S=1/2000)

Fig. 33 K-8 区土層柱状図

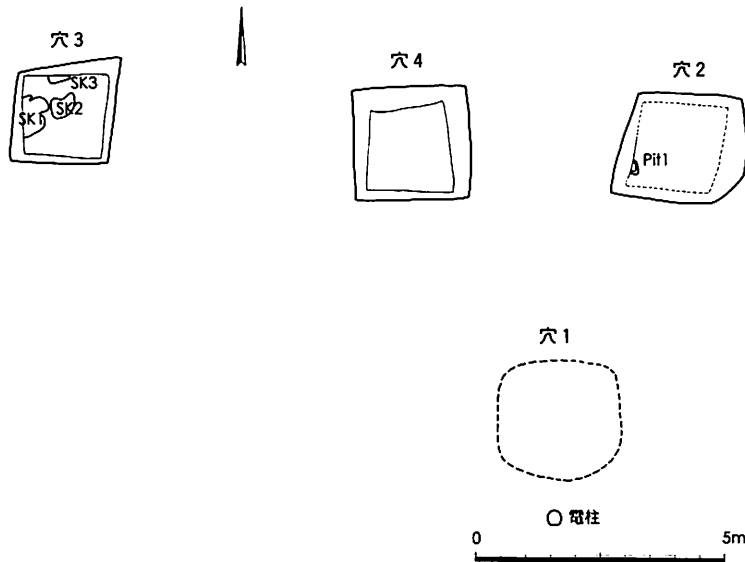


Fig. 34 K-8 区掘削穴位置 (S=1/30)

前者は、120～150cmの深さに重機によって掘削されたが、表土・客土のみで、遺物包含層を確認することは出来なかった。後者は桜を移動するために75cmの深さに掘削したが、表土・客土のみであった。

移植先であるグラウンド南東隅では、重機によって約1m前後の移植穴を設けたが、壁面・穴底面に遺構が確認できた時点で掘削を中止し、清掃、写真記録・平面測量などを行なって、調査を終了した(移植穴1～4: Fig. 34)。旧地形は、グラウンド東側より西方向に傾斜しているようであり、包含層も旧地形に沿って形成されるため、包蔵状況は非常に良好である。今後、本地区で工事等が行なわれる場合、注意すべきであり、迅

速な対応を必要とする。

穴 1

南壁の観察では、旧地形が西に向かって急激に傾斜していることと、層位横転部分が確認された。調査は、写真撮影し、メモをとって終了した。

1層 表土・客土。

2層 弥生時代の遺物包含層。黒色

(10YR2/1)シルト。締まっている。1cm大のパミスが混じる。数点の土器が出土している。壺の刻目突帯部(20)、平底の底部(22)、古墳時代前期の東原式甕(23)などが出土した (Fig. 35, PL. 33-34, Tab. 13)。

3層 喜界アカホヤテフラ。褐色(10YR4/6)シルト。濁っている。0.5～1cm大のパミスが混じる。

4層 縄文早期の遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。1～3cm大のパミスが混じる。

5層 桜島薩摩テフラと4層との漸移層。暗褐色(10YR3/4)砂。大小パミス多量。

穴2～4は、約1mの移植穴を設けた時点で、写真撮影をし、平板測量で遺構の平面測量(Fig. 34)・土層観察を行い、調査を終了した。

穴 2

土層確認終了前に埋め戻されたため、正確な観察が行なえなかった。

1層 表土・客土。

2層 弥生時代の遺物包含層。黒色(10YR2/1)シルト。

Tab.13 2001-D 穴1・3出土土器観察

No.	地点・層	種別	器種	部位	色調	混和材	混和材の 多さ	調整	備考
20	穴1・2層	弥生時代 前期か中 期前半	壺	頸部 突帯	外面:橙5YR6/6.内面:明赤褐5YR5/6. 器内:灰黄褐10YR5/2.	粗砂:石英・赤色粒.砂:石英・黒色粒. 細砂:石英・黒色粒.	2	内外面:(-)ナデ.	
21	穴3・2a層	弥生時代 前期か中 期前半	壺	底部	外面:橙5YR6/6.内面:橙7.5YR6/6.器 内:にぶい黄褐10YR5/3.	礫:石英.粗砂:石英.砂:石英.細砂: 石英.	2	外面:()刷毛目→(?)ナデ. 外面はハジ ケ? 内面:(/)磨き.	
22	穴1・2層	弥生前期?	甕?	底部	外面:にぶい橙7.5YR6/4.内面:灰黄 褐10YR5/2.	粗砂:石英・赤色粒.砂:赤色粒.細砂: 黒色粒.	2	外面:(-)ナデ.	
23	穴1・2層	東原式	甕	胴部 突帯	外面:黒褐色2.5Y3/1.内面:黒褐色 2.5Y3/2.器内:黄褐色2.5Y5/3.	礫:白色粒・石英.粗砂:白色粒.砂:白 色粒・石英.	5	内外面:(-\\)刷毛目→(-) スス付着. ナデ.	

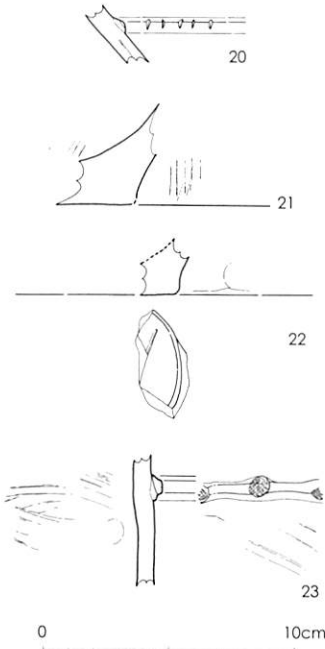
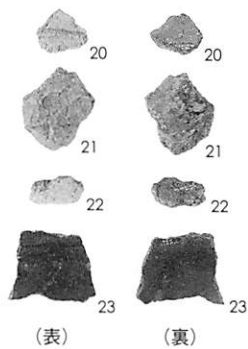


Fig. 35 穴1・3出土土器(S=1/30)



PL. 33 穴1・3出土遺物

締まっている。1cm
大のパミスが混じ
る。

3層 喜界アカホヤ
テフラ。褐色
(10YR4/6)シルト。
この上面でピット
が確認された。

穴3

1層 表土・客土。
2a層 弥生時代の遺
物包含層。黒色
(10YR2/1)シルト。
締まっている。
2b層 弥生時代の遺
物包含層。黒褐色
(10YR2/2)シルト。
やや締まりがない。
パミス混じり。

穴4

住居跡が2基
確認されている
(Fig. 36)。

1層 表土・客土。
2層 弥生時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)シルト。
パミス混じり。1点の土器が出土しているが図化でき
ないほどの小破片である。
3a層 喜界アカホヤテフラ。褐色(10YR4/6)シルトベー
スに、黒褐色(10YR2/3)が混じる。
3b層 喜界アカホヤテフラ。褐色(10YR4/6)シルト。パ
ミス混じり。
4層 縄文時代早期の遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)砂
質シルト。パミスが多く混じる。
住居①埋土 黒褐色(10YR2/2)シルト。パミスや土器小
破片が混じる。
住居②埋土 黒褐色(10YR2/2)類似。やや明るいシル
ト。パミスや土器小破片が混じ
る。

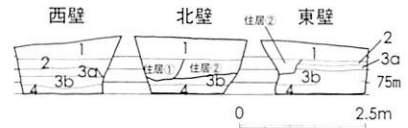


Fig. 36 穴4壁面(S=1/30)

2001-E 農学部保存樹林内掘削
(学祭時のゴミ穴)に伴う立会調査
調査地点 農学部保存樹林地域内
(郡元団地H-6区)

調査期間 2001年11月9日

11月8日夕方、大学総合研究博
物館の橋本達也氏より、農学部保
存樹林内に掘削穴があるとの連絡
を受けた。施設部企画課を通して
問い合わせた結果、農学部の学生
が、大学祭準備の折り、大量に廃
棄されるゴミを処理する場所とし
て掘削したとのことであった。本
調査室では、その顧問、学生に構
内の埋蔵文化財の包蔵状況を説明
した上で、今後は大学構内の掘削
を行なう場合、埋蔵文化財調査室

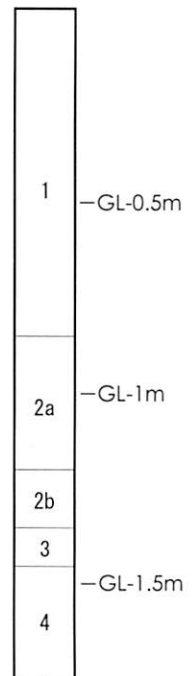


Fig. 37 H-6区土層柱状図

2c層 弥生時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)シル
ト。やや締まりがない。パミス混じり。数点の弥生土
器が出土しているが、図化できるのは1点のみ(21)
である(Fig. 35, PL. 33, Tab. 13)。

2d層 弥生時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)シルト
ベースに褐色(10YR4/6)シルトが混じる。

3層 喜界アカホヤテフラ。褐色(10YR4/6)シルト。こ
の上面で不定形土壌が確認された。

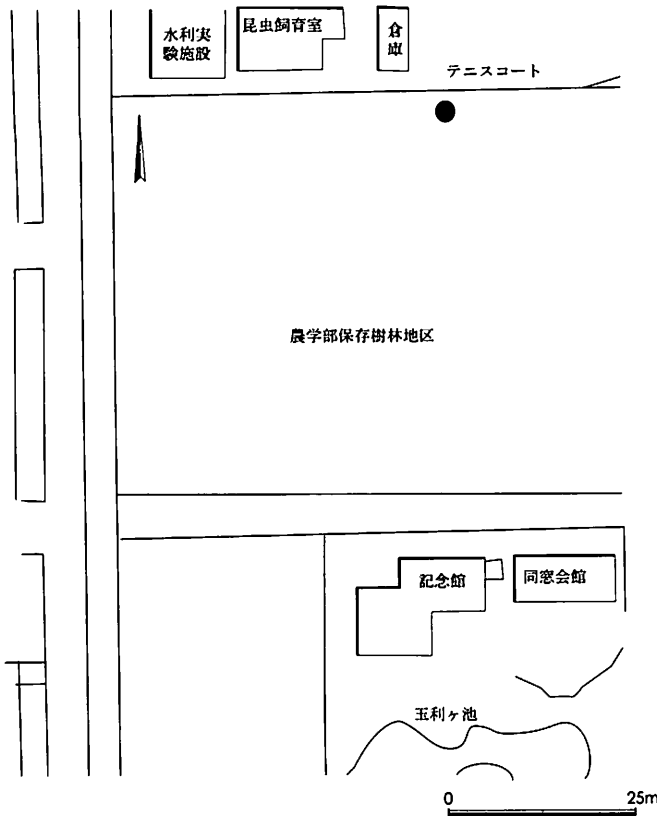


Fig. 38 郡元団地 H-6 区(S=1/1000)

に届出ることを通達した。同地点は幸い水田層のみであり、遺物分布域には重なっていない。壁面清掃を行い、平板測量・壁面観察メモなどを行い、調査を終了した(Fig. 38)。

層位は、4 枚確認された(Fig. 37)。

- 1層 表土・腐植土。
- 2a層 水田層。灰褐色(7.5YR5/2)砂。締まっている。0.5～5cm 大のパミス混じり。
- 2b層 水田層。灰褐色(7.5YR4/2)砂。締まっている。1cm 大のパミス混じり。
- 3層 洪水層? にぶい黄褐色(10YR5/3)ベースに、0.5～5cm 大のパミス混じり。褐色(7.5YR4/6)の鉄分混

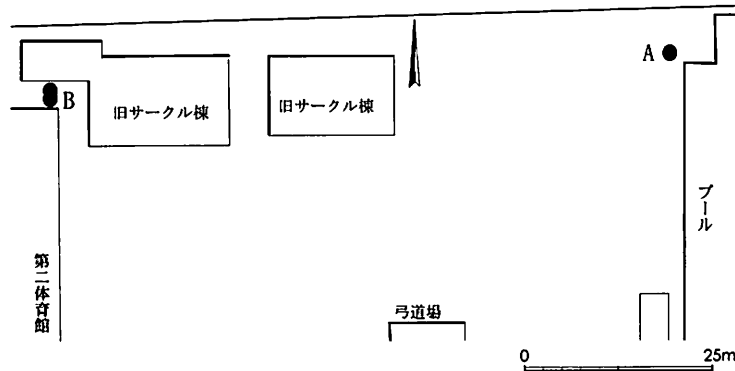


Fig. 39 郡元団地 M-4・5 区(S=1/1000)

じり。粗・細砂。
4層 水田層。褐灰色(10YR4/1)シルト。締りがよい。鉄分の浸透あり。

2001-F 課外活動施設新営機械設備工事に伴う立会調査

調査地点 教育学部サークル棟(郡元団地 M-4・5 区)
調査期間 2001年11月28日・12月22・23日・2002年1月10日・2月22日

サークル棟東側の機械設備工事に伴う調査を行った(Fig. 39-40)。4ヶ所を135cmまで重機によって掘り下げたが、攪乱層であった。マンホールに連結する配管工事の際には、比較的良好な状態で包含層が認められたが、遺物は出土しなかった(A地点)。B地点は、サークル棟のアーチを建てるための掘削穴が2箇所掘られた。若干の遺物が出土している。各地点ともに写真撮影・メモを行い、調査を終了した。

A地点

層位は3枚確認された。

- 1層 表土・客土。
- 2層 弥生時代～古墳時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)シルト。
- 3層 無遺物層。にぶい黄色(2.5Y6/3)砂層。

B地点

層は5枚確認された。北壁より4層から掘り込まれたピットを2箇所確認(ピット埋土：黒褐色(10YR2/2)シルト)。

- 1層 表土・客土。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト。0.5cm 大の白色自然石を含む。

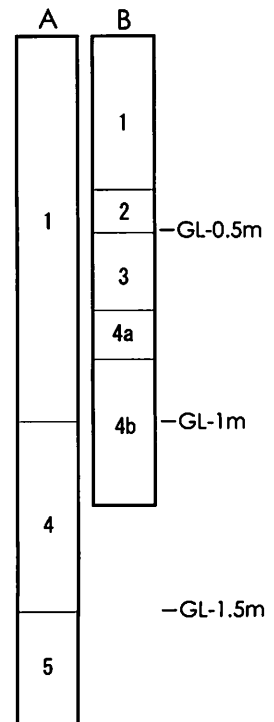


Fig. 40 M-4・5 区土層柱状図

3層 におい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト。1.5cm大の
パミス, 1cm大の白色石を含む。

4a層 古墳時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)砂質
シルト。

4b層 弥生時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/1)砂質
シルト。

2001-G 教育学部幹線並木整備工事に伴う立会調査
調査地点 教育学部道路沿いと食堂裏(郡元団地M・N・O-
6・7・8区)

調査期間 2002年1月10日・2月5～17日
1月よりウラジロガシ・クロガネモチ・スタジイ・ソ
テツなどの樹木並木整備であったが, 本調査室に連絡
無く, 設備課によって行なわれていた。本調査室では急
遽, 設備課の担当者との話し合いによって, その手続
きの必要性を通達し, 2月から立会調査が行なわれた
(Fig.41・42)。

A地点

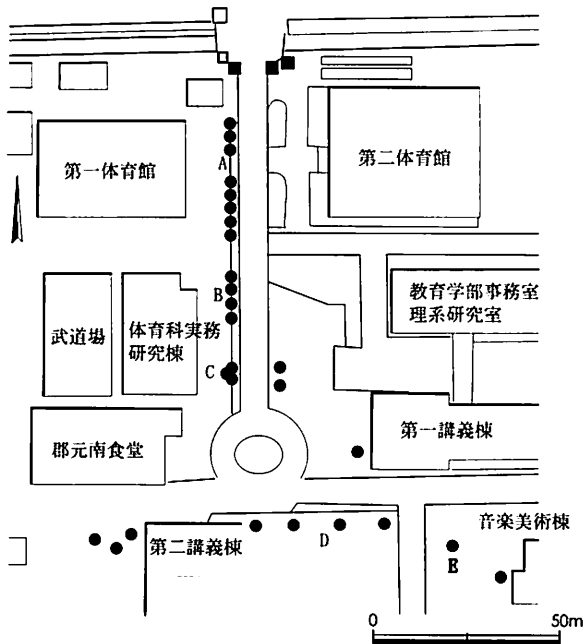


Fig.41 郡元団地M・N・O-6・7・8区(S=1/2000)

- 1層 表土・客土。
- 2層 黄褐色(10YR5/6)シルト質砂。
- 3層 褐灰色(10YR4/1)砂質シルト。
- 4層 黒褐色(7.5YR3/1)シルト。

B地点

- 1層 表土・客土。
- 2層 弥生時代～古代の遺物包含層に対応。今回は遺物
が出せず。黒褐色(10YR2/2)シルト。2cm大の自然石
含む。
- 3層 暗褐色(10YR3/3)シルト。

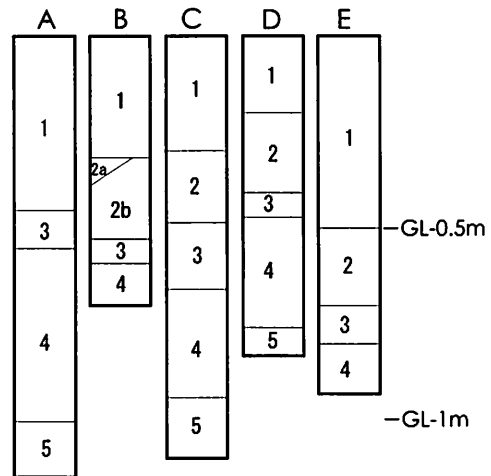


Fig.42 M・N・O-6・7・8区土層柱状図

- 4層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。白色の自然石を
含む。
- 5層 明褐色(7.5YR5/6)シルト。白色の自然石を含む。
- 6層 黒褐色(10YR2/3)シルト。6cm大のパミスを含む。

C地点

- 西壁に4層から掘り込まれたピットを確認(ピット
埋土: 黒色(10YR2/1)シルト)。
- 1層 表土・客土。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。
- 3層 明褐色(7.5YR5/6)シルト。
- 4層 黒褐色(10YR2/3)シルト。
- 5層 褐色(7.5YR4/4)砂質シルト。

D地点

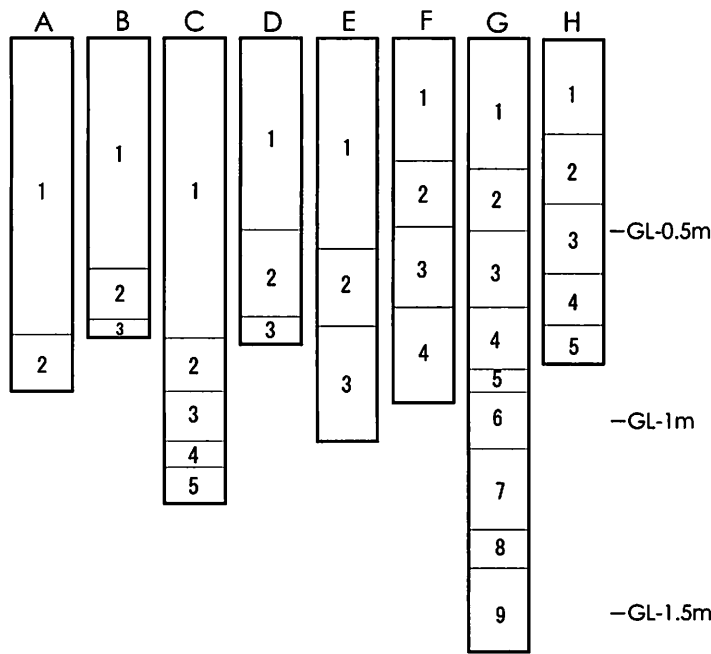
- 1層 表土・客土。
- 2層 褐灰色(10YR4/1)シルト。0.5cm以下のパミス
を含む。
- 3a層 明褐色(7.5YR5/6)シルト。
- 3b層 黒色(5YR1.7/1)シルト。1～5cm大のパミス含
む。
- 4層 褐色(7.5YR4/4)砂。1～5cm大のパミス含む。

E地点

- 1層 表土・客土。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト。
- 3a層 暗褐色(7.5YR3/4)シルト。
- 3b層 黒色(5YR1.7/1)シルト。1～5cm大のパミス含
む。

2001-H 理学部支障樹木移植等工事に伴う立会調査
調査地点 理学部1号館中庭・サークル棟南側→農学
部・工学部・理学部・教育学部(郡元団地D・E-4, K-10,
P-5, J・K-9区)

調査期間 2002年3月22・23・25・26・29日



記録をとり調査を終了した。

A地点(Fig. 43・44)

- 1層 表土・客土。
- 2層 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト。

B地点

(Fig. 43・44)

- 1層 表土・客土。
- 2層 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト。0.5 ~ 1cm 大のパミスを含む。
- 3層 オリーブ黒色(5Y3/1)に類似したシルト質粗砂層。パミスを多量に含む。

C地点(Fig. 43・45)

- 1層 表土・客土
- 2層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。
- 3層 黒褐色(10YR3/1)シルト質砂。
- 4層 褐黒色(10YR4/1)シルト質砂。
- 5層 暗紫灰(5P4/1)シルト質砂。

Fig. 43 D・E-4, K-10, P-5, J・K-9 区土層柱状図

理学部改修工事(調査コード 2001-2)と総合研究棟Ⅱ建設(調査コード 2002-1)のための、支障樹木移植に伴う立会調査が行なわれた。移植元である理学部中庭は攪乱されており、記録は行なわなかった。移植先は、農学部・工学部・理学部・教育学部である。サークル棟南側の移植元は、複数の包含層が良好に残存しており、

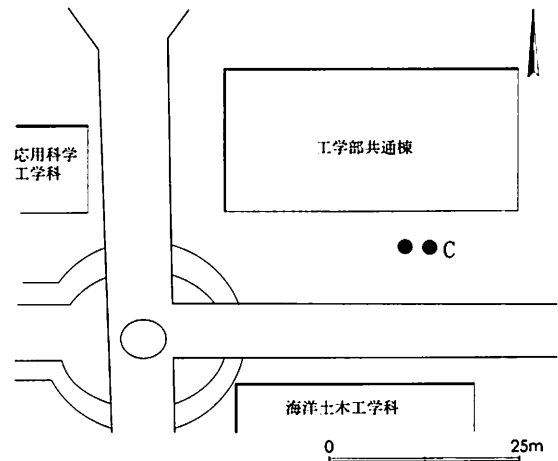


Fig. 45 郡元団地 K-10 区(S=1/1000)

D地点(Fig. 43・46)

- 1層 表土・客土
- 2層 黒褐色(10YR3/1)シルト質砂。パミスを含む。
- 3層 黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。鉄分が浸透する。

E地点(Fig. 43・47)

- 1層 表土・客土

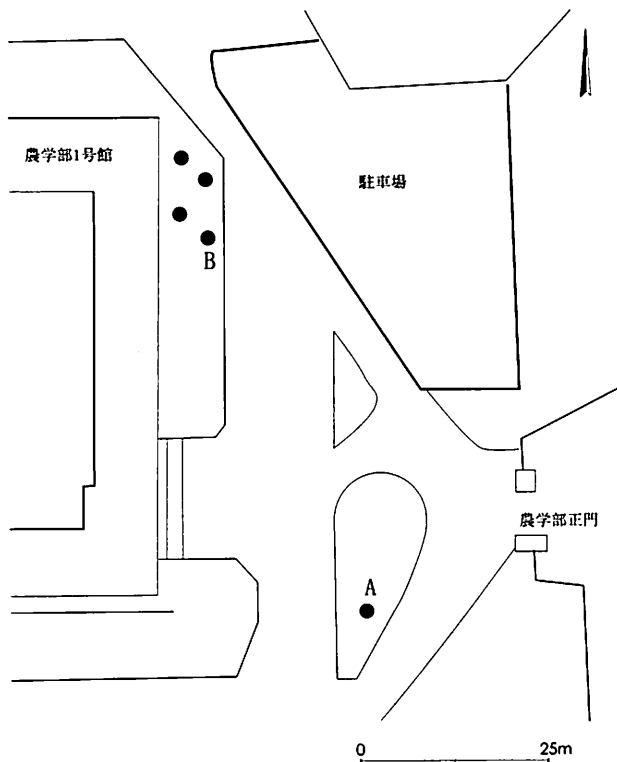


Fig. 44 郡元団地 D・E-4 区(S=1/1000)

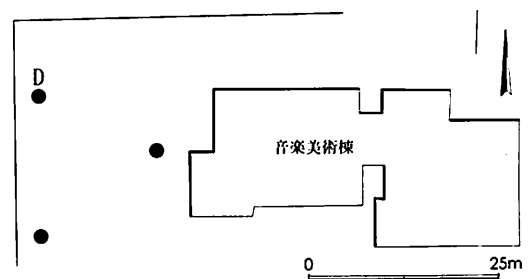


Fig. 46 郡元団地 P-5 区(S=1/1000)

- 2層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。鉄分を含む。
- 3層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂。マンガンを含む。

F地点(Fig.43・47)

- 1層 表土・客土
- 2層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂。
- 3層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。
- 4層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂。

G地点(Fig.43・47)

- 1層 表土・客土
- 2層 褐灰色(7.5YR4/1)砂質シルト。0.5～1cm大のパミスを含む。鉄分の浸透有り。
- 3層 暗褐色(10YR3/3)シルト質砂。0.5cm大のパミスを含む。上部に鉄分、下部にマンガンが浸透する。
- 4層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト。1cm大のパミスを含む。マンガン浸透。
- 5層 褐灰色(7.5YR4/1)砂質シルト。1cm大のパミスを含む。マンガン浸透。
- 6層 灰褐色(7.5YR4/2)砂質シルト。3cm大のパミスを含む。マンガン浸透。
- 7層 褐灰色(7.5YR4/2)シルト質砂。
- 8層 黒褐色(7.5YR3/1)シルト。粘性あり。
- 9層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト。粘性あり。

H地点(Fig.43・47)

- 1層 表土・客土。
- 2層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。
- 3層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂。0.5cm大のパミスを含む。鉄分が浸透する。

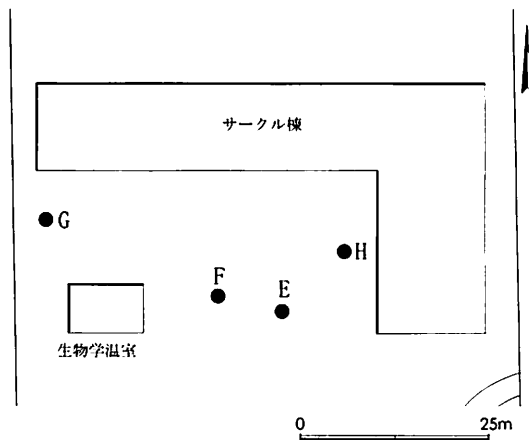


Fig.47 郡元団地 J・K-9区(S=1/1000)

- 4層 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質砂。0.5cm大のパミスを含む。マンガン浸透。
- 5層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂。0.5cm大のパミスを含む。マンガン浸透。

2001-I 医学部校舎新営その他機械設備工事に伴う立会調査

調査地点 医学部新保健学科棟西側(桜ヶ丘団地 I-8区)

調査期間 2002年3月25日

医学部校舎新営その他機械設備工事に伴う立会調査を行なった(Fig.48・49)。縄文時代早期前葉の遺物包含層(2層)や後期旧石器時代～縄文時代草創期にかけての遺物包含層(3層)が確認されたが、遺構・遺物ともに確認されていない。

- 1層 表土・客土。

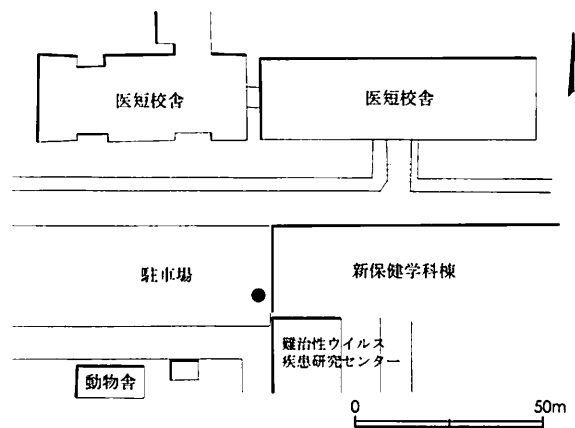


Fig.48 桜ヶ丘団地 I-8区(S=1/2000)

- 2層 縄文時代早期前葉の遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)シルト質砂。小礫や1.2～5mm大のパミス含む。
- 3層 桜島薩摩テフラ。
- 4層 後期旧石器時代～縄文時代草創期の遺物包含層。いわゆる「チョコ層」。黒褐色(10YR1/3)シルト。水分を多く含み、粘性が強い。

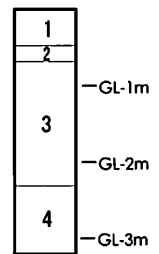


Fig.49 I-8区土層柱状図

埋蔵文化財調査室要項

鹿児島大学埋蔵文化財調査室要項

○鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

昭和60年4月18日

制定

(設置)

第1条 鹿児島大学(以下「本学」という。)に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(審議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行うため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

- (1) 基本計画の策定に関すること。
- (2) 調査結果に基づく対策に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長が指名する副学長
- (2) 各学部長、附属図書館長、医学部附属病院長及び歯学部附属病院長
- (3) 事務局長

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、前条第1号の委員をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は、出席委員の3分の2以上をもって決する。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行うため、埋蔵文化財調査委員会(以下「調査委員会」という。)を置く。

第8条 調査委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。
- (3) 第13条に規定する調査室の予算に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関すること。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、

学長が任命する。

(1) 各学部の教授、助教授又は講師の中から選出された者各1名

(2) 第15条第2項に規定する調査室長

2 前項第1号の委員の任期は、2年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前条第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(調査室)

第13条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行うための埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長、主任及びその他必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(事務)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、施設部企画課において処理する。

附 則

- 1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。
- 2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第9条第2項及び第15条第4項の規定にかか

ならず，昭和 62 年 3 月 31 日までとする。

3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則(昭和 51 年 1 月 22 日制定)は，廃止する。

附 則

この規則は，平成 9 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規則は，平成 13 年 4 月 1 日から施行する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（平成 13 年 4 月 1 日現在）

委員長 石田忠彦（鹿児島大学副学長）

委 員 辰村 康（法文学部長）

坂尾 隆（教育学部長）

井上政義（理学部長）

永田行博（医学部長）

納 光弘（医学部附属病院長）

大工原恭（歯学部長）

伊藤学而（歯学部附属病院長）

矢野利明（工学部長）

西中川駿（農学部長）

上田耕平（水産学部長）

荒井 啓（連合農学研究科長）

山口建太郎（事務局長）

中山右尚（附属図書館長）

・鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会委員（平成 13 年 4 月 1 日現在）

委員長 辻尾昇三（工学部教授）

委 員 本田道輝（法文学部助教授）

日隈正守（教育学部助教授）

竹内 亨（医学部教授）

小椋 正（歯学部教授）

古川一男（理学部教授）

松元光春（農学部助教授）

中村啓彦（水産学部講師）

新田栄治（調査室長併任 法文学部教授）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長（併） 法文学部教授 新田栄治

主任（併） 法文学部助手 中村直子

（併） 法文学部助手 新里貴之

技術補佐員 寒川朋枝

技術補佐員 王 力明

受贈図書一覧

書名	発行所	書名	発行所
単行本 上淀庵寺彩色壁画の謎を追う 図説中国古代銅鏡史 太宰府市史 環境資料編 縄文時代重層社会論	淀江町教育委員会 海鳥社 太宰府市 松永幸男著作集刊行会	平成9.10年度神戸市遺跡現地説明 会資料集 倉敷埋蔵文化財センター年報7 松山市埋蔵文化財調査年報12	神戸市教育委員会 倉敷埋蔵文化財センター 松山市教育委員会・財団法人 松山市生涯学習進行財団埋蔵 文化財センター
研究紀要 かながわの考古学 研究紀要6 紀要第11号 富山考古学研究第4号	財団法人かながわ考古学財団 大田区立郷土博物館 財団法人富山県文化振興財団埋 蔵文化財調査事務所 金沢大学文学部考古学講座 三重県埋蔵文化財センター 名古屋市博物館 静岡市登呂博物館 財団法人静岡県埋蔵文化財調査 研究所 天理大学考古学研究室	愛媛大学埋蔵文化財調査室年 報1995.1996年度 島根県教育庁埋蔵文化財調査セン ター年報IX 下関市立考古博物館年報6 福岡県埋蔵文化財発掘調査年報-平 成10年度- 福岡県埋蔵文化財発掘調査年報-平 成11年度- 春日市埋蔵文化財年報6-8 熊本大学埋蔵文化財調査室2000年 度7 誂谷村立歴史民俗資料館年報第26 号	愛媛大学埋蔵文化財調査室 島根県教育委員会 下関市立考古博物館 福岡県教育委員会 福岡県教育委員会 春日市教育委員会 熊本大学埋蔵文化財調査室 誂谷村歴史民俗資料館
古事 天理大学考古学研究室紀要 第5冊 考古学論功第23冊 大阪市文化財協会研究紀要第4号 兵庫県埋蔵文化財研究紀要 創刊 号 研究紀要第2集 研究紀要第5号 ミュージアム知覧紀要第7号	奈良県立橿原考古学研究所 財団法人大阪市文化財協会 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調 査事務所 広島県立歴史民俗資料館 下関市立考古博物館 ミュージアム知覧	逐次刊行物 苦小牧の埋蔵文化財No.14 苦小牧市埋蔵文化財調査センター 年報3 テエタ 北海道埋蔵文化財センタ ーだより第5.6号 沖縄研究ノート10 研究ノート10号 歴史人類第29号 きみさらづ第17.18号 人類史集報2000 青山考古第18号 資料目録12 埋文とやまvol.74 かがみはらの埋文 みえNo.30.31 リキア地方ビザンティン遺跡調査 団ニュースレターNo.1 名古屋市博物館だより139-144 研究所報No.89-96 ひらかた文化財だより第47.48.49 号 アスカディア・古墳の森vol.14.15 葦火91-96号 大阪府立近つ飛鳥博物館館報6 リーフレット京都No.131-158 京都府埋蔵文化財情報第79-82号 清陵第105.106号 ひょうごの遺跡39-42号 いぶきNo.29.30	苦小牧市埋蔵文化財調査セン ター 苦小牧市埋蔵文化財調査セン ター 財団法人北海道埋蔵文化財セン ター 宮城学院女子大学キリスト教 文化研究所 財団法人茨城県教育財団 筑波大学歴史・人類学系 財団法人君津郡市文化財セン ター 東京都立大学人類史調査グル ープ 青山考古学会 東京都埋蔵文化財センター 富山県埋蔵文化財センター 各務原市埋蔵文化財調査セン ター 三重県埋蔵文化財センター リキア地方ビザンティアン遺 跡調査団 名古屋市博物館 財団法人静岡県埋蔵文化財調 査研究所 財団法人枚方市文化財研究調 査会 大阪府立近つ飛鳥博物館 財団法人大阪市文化財協会 大阪府立近つ飛鳥博物館 財団法人京都市埋蔵文化財研 究所・京都市考古資料館 財団法人京都府埋蔵文化財調 査研究センター 奈良県立橿原考古学研究所 兵庫県教育委員会 広島県教育委員会
年報 調査年報13 平泉文化研究年報第1号 東北大学埋蔵文化財調査年報14-16 東総文化財センター年報6.7 年報No.18 財団法人千葉市文化財調査協会年 報11-13 年報20 年報8 年報17 静岡市立登呂博物館館報11 平成12年度三重県埋蔵文化財年報 橿原考古学研究所年報25 高槻市文化財年報平成11年度 枚方市文化財年報22 京都市考古資料館年報 平成9.10年 度 京都市考古資料館年報 平成11.12 年度 城郭研究室年報vol.10 神戸市埋蔵文化財年報 平成11年度年報 平成5-8年度神戸市遺跡現地説明 会資料集	財団法人北海道埋蔵文化財セン ター 岩手県教育委員会 東北大学埋蔵文化財調査研究セ ンター 財団法人東総文化財センター 財団法人君津郡市文化財センタ ー 財団法人千葉市文化財調査協会 財団法人茨城県教育財団 財団法人かながわ考古学財団 財団法人静岡県埋蔵文化財調査 研究所 静岡市立登呂博物館 三重県埋蔵文化財センター 奈良県立橿原考古学研究所 高槻市教育委員会 財団法人枚方市文化財研究調査 会 京都市考古資料館 京都市考古資料館 姫路市立城郭研究室 神戸市教育委員会 兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会		

書名	発行所	書名	発行所
歴風第29号	広島県立歴史民俗資料館	杉久保選谷遺跡	財団法人かながわ考古学財団
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第25.26号	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	神明久保遺跡	財団法人かながわ考古学財団
自然科学研究所研究報告第26号	岡山理科大学	上行寺真遺跡	財団法人かながわ考古学財団
所報吉備第30.31号	岡山県古代吉備文化財センター	稲荷木遺跡	財団法人かながわ考古学財団
石見銀山遺跡ニュースNo.2	島根県・大田市・温泉津町・仁摩町教育委員会	一升井遺跡所在やぐら群	財団法人かながわ考古学財団
古代文化研究第9号	島根県古代文化センター	一心院跡所在やぐら群	財団法人かながわ考古学財団
ドキ土器まいぶんNo.14-16	島根県埋蔵文化財調査センター	王禰寺 通やぐら遺跡	財団法人かながわ考古学財団
佐加太第14.15号	滋賀県坂田郡社会教育研究会文化財部会	覚栄寺やぐら群遺跡	財団法人かながわ考古学財団
あやらぎNo.5	下関市立博物館	覚園寺総門跡東やぐら群	財団法人かながわ考古学財団
歴史散歩No.1.13.14	久留米市教育委員会	釜利谷東6丁目西地区やぐら群	財団法人かながわ考古学財団
ひとよし歴史研究第4号	人吉市教育委員会	下糟屋・下町並遺跡	財団法人かながわ考古学財団
南日本文化第34号	鹿児島国際大学付属地域総合研究所	吉岡遺跡群IX	財団法人かながわ考古学財団
西南諸島調査記念論文集	鹿児島短期大学付属南日本文化研究所	吉岡遺跡群VI	財団法人かながわ考古学財団
薩琉文化第72.73号	鹿児島短期大学付属南日本文化研究所	吉岡遺跡群VII	財団法人かながわ考古学財団
南九州貝殻文系土器I	南九州縄文研究会	向原遺跡III	財団法人かながわ考古学財団
調査報告書		光触寺橋やぐら・大江稲荷跡所在やぐら	財団法人かながわ考古学財団
米原3遺跡	鶴川町教育委員会	三ヶ岡遺跡I	財団法人かながわ考古学財団
大楽毛1遺跡調査報告書I	鉦路市埋蔵文化財調査センター	三ヶ岡遺跡II	財団法人かながわ考古学財団
郡山遺跡	仙台市教育委員会	山王堂東谷やぐら群	財団法人かながわ考古学財団
下飯田遺跡	仙台市教育委員会	飯綱上遺跡	財団法人かながわ考古学財団
沼向遺跡第1?3次調査	仙台市教育委員会	和田山やぐら群遺跡II	財団法人かながわ考古学財団
水沢遺跡群範囲確認調査	水沢市教育委員会	名越遺跡内大谷戸やぐら群	財団法人かながわ考古学財団
胆沢城跡	水沢市教育委員会	池子遺跡群X	財団法人かながわ考古学財団
岩手県埋蔵文化財発掘調査概報	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	池子遺跡群X木器集成図録	財団法人かながわ考古学財団
縄文時代島嶼部イノシシに関する基礎的研究	いわき短期大学	長岡西遺跡	財団法人かながわ考古学財団
上野陣場遺跡	財団法人茨城県教育財団	田中・万代遺跡	財団法人かながわ考古学財団
谷畑遺跡	財団法人茨城県教育財団	長勝寺跡内やぐら群	財団法人かながわ考古学財団
神田遺跡3	財団法人茨城県教育財団	長柄・桜山第1・2号墳	神奈川県教育委員会
金田西・西坪B遺跡	財団法人茨城県教育財団	『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査	神奈川県教育委員会/鎌倉市教育委員会/財団法人かながわ考古学財団
宮後遺跡I	財団法人茨城県教育財団	矢代遺跡	神奈川県教育委員会
稲岡遺跡	財団法人茨城県教育財団	長野県埋蔵文化財発掘調査要覧その10.11	長野県教育委員会
桶の沢久保遺跡	財団法人茨城県教育財団	椿野遺跡II	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
下大井遺跡	財団法人茨城県教育財団	椿野遺跡II	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
鎌田遺跡	財団法人茨城県教育財団	菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
館野遺跡	財団法人茨城県教育財団	富士川SA関連遺跡	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
坂戸遺跡	財団法人茨城県教育財団	領家遺跡II・梅橋古墳	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
十万原遺跡1	財団法人茨城県教育財団	矢崎遺跡	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
十万原遺跡2	財団法人茨城県教育財団	御領所遺跡	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
西平塚梨ノ木遺跡	財団法人茨城県教育財団	山林遺跡	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
石畑遺跡	財団法人茨城県教育財団	広久手18.20.30号竪跡	財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
滝坂横穴墓	財団法人茨城県教育財団	名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XII)	名古屋大学年代測定総合研究センター
大山I遺跡2	財団法人茨城県教育財団	針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡	財団法人岐阜県文化財保護センター
長峰城跡	財団法人茨城県教育財団	寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡	財団法人岐阜県文化財保護センター
中原遺跡3	財団法人茨城県教育財団	佐口遺跡	財団法人岐阜県文化財保護センター
長野江向山遺跡	財団法人茨城県教育財団	富田清友遺跡	財団法人岐阜県文化財保護センター
津賀遺跡	財団法人茨城県教育財団	中山道	財団法人岐阜県文化財保護センター
島名前野遺跡	財団法人茨城県教育財団		
島名前野東遺跡・島名境松遺跡・谷田部漆遺跡	財団法人茨城県教育財団		
殿開遺跡	財団法人茨城県教育財団		
加止里第6号	財団法人香取郡市文化財センター		
伊地山遺跡II	財団法人香取郡市文化財センター		
五十塚遺跡	財団法人香取郡市文化財センター		

書名	発行所	書名	発行所
八幡竈跡発掘調査報告書	岐阜県土岐市教育委員会	萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書	神戸市教育委員会
興道寺古墳群	福井県美浜町教育委員会	白水遺跡第3.6.7次 高津橋大塚遺跡第1.2次	神戸市教育委員会
埋蔵文化財調査概要-平成12年度-	財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所	南僧尾	神戸市教育委員会
鎌刃城跡発掘調査概要報告書	米原町教育委員会	二葉町遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会
旧醒井郵便局舎修理工事報告書	米原町教育委員会	ゆの山御てん-有馬温泉・湯山遺跡発掘調査の記録-	神戸市教育委員会
松尾寺遺跡発掘調査報告書	米原町教育委員会	玉津田中遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会
川口家住宅(旧醒井宿間屋場)修理工事報告書	米原町教育委員会	御蔵遺跡	神戸市教育委員会
福島城跡・米原駅西遺跡	米原町教育委員会	住吉宮町遺跡(第19.20次)	神戸市教育委員会
北鏡越遺跡・津賀古墳群発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	住吉宮町遺跡(第24.32次)	神戸市教育委員会
羽根中島遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	若松町遺跡	神戸市教育委員会
コドノB遺跡(第2.3次)発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	勝尾遺跡I	神戸市教育委員会
金剛坂遺跡(第5次)辰ノ口古墳群(第3次)発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	上沢遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会
堀田地区内遺跡発掘調査報告II	三重県埋蔵文化財センター	松野遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会
蛇谷貝塚発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	TSUBOHORI	姫路市教育委員会
国分北遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	特別史跡姫路城跡I	姫路市教育委員会
高ノ御前遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	二郎宮ノ前遺跡	兵庫県教育委員会
松尾前田遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	奥新田東古墳群	兵庫県教育委員会
上惣作遺跡	三重県埋蔵文化財センター	白沢3.5号窯	兵庫県教育委員会
神戸遺跡(第2次)替田遺跡(第3次)発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	外野野遺跡	兵庫県教育委員会
前田町屋遺跡(第1次)発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	貴船神社遺跡	兵庫県教育委員会
天花寺北瀬古遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	亀田遺跡	兵庫県教育委員会
嶋抜II	三重県埋蔵文化財センター	亀田遺跡(第2分冊)	兵庫県教育委員会
嶋抜III	三重県埋蔵文化財センター	久留美・跡部竈跡群	兵庫県教育委員会
堀町遺跡	三重県埋蔵文化財センター	向山古墳群.市条寺古墳群.一乗寺経塚.矢別遺跡	兵庫県教育委員会
埋蔵文化財発掘調査概報II	三重県埋蔵文化財センター	志方竈跡群I	兵庫県教育委員会
埋蔵文化財発掘調査概報IV	三重県埋蔵文化財センター	志方竈跡群II	兵庫県教育委員会
埋蔵文化財発掘調査概報XIII	三重県埋蔵文化財センター	大釜向山遺跡	兵庫県教育委員会
埋蔵文化財発掘調査報告VII	三重県埋蔵文化財センター	大亀谷山古墳	兵庫県教育委員会
有滝遺跡	三重県埋蔵文化財センター	高松町遺跡	兵庫県教育委員会
力男城跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	福島古墳群	兵庫県教育委員会
橘寺	奈良県立橿原考古学研究所	北摂ニュータウン内遺跡調査報告書VII下西山遺跡	兵庫県教育委員会
大和木器資料I	奈良県立橿原考古学研究所	長坂遺跡	兵庫県教育委員会
南郷遺跡群IV	奈良県立橿原考古学研究所	木之内城跡	兵庫県教育委員会
南郷遺跡群V	奈良県立橿原考古学研究所	岡山大学構内遺跡調査研究年報18	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
奈良県遺跡調査概報(第1.2分冊)	奈良県立橿原考古学研究所	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
待兼山遺跡III	大阪大学埋蔵文化財調査委員会	岡谷大溝散布地.三須今溝・河原・島田遺跡.井手見延・天原遺跡ほか	岡山県古代吉備文化財センター
勝福寺跨負測量調査報告書	大阪大学大学院文学研究科考古学研究室	原尾島遺跡.沢田遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
古墳時代前・中期における埋蔵人骨と親族関係	大阪大学大学院文学研究科	上東遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
大阪市埋蔵文化財発掘調査報告	財団法人大阪市文化財協会	下庄遺跡.上東遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告	財団法人大阪市文化財協会	船山遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
長原・瓜破遺跡発掘調査報告XVI	財団法人大阪市文化財協会	旦山遺跡2	岡山県古代吉備文化財センター
長原・瓜破遺跡発掘調査報告XVII	財団法人大阪市文化財協会	平田遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
長原遺跡東部地区発掘調査報告IV	財団法人大阪市文化財協会	天瀬遺跡.岡山城外堀跡	岡山県古代吉備文化財センター
森小路遺跡発掘調査報告I	財団法人大阪市文化財協会	津島遺跡3	岡山県古代吉備文化財センター
大福遺跡調査報告	財団法人桜井市文化財協会	清水谷遺跡	矢掛町教育委員会
1992年度発掘調査報告書1	財団法人桜井市文化財協会	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報XVI	広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室
1992年度発掘調査報告書2	財団法人桜井市文化財協会	帝釈峽遺跡群発掘調査室年報XV	広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室
1994年度発掘調査報告書1	財団法人桜井市文化財協会	妻木晩田遺跡	淀江町教育委員会
1995年度発掘調査報告書1	財団法人桜井市文化財協会	淀江町内遺跡VII	淀江町教育委員会
平成7年度国庫補助により発掘調査報告書	財団法人桜井市文化財協会	百塚遺跡群IV	淀江町教育委員会
史跡今城塚古墳	高槻市教育委員会	湯の奥遺跡・登安寺遺跡・湯後遺跡・土井砂遺跡	島根県教育委員会
平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告	財団法人八尾市文化財調査研究会	堂床遺跡	島根県教育委員会
		茂芳目遺跡・布志目遺跡・大堤II遺跡・大堤I遺跡・真野谷遺跡・杉谷遺跡・室山遺跡	島根県教育委員会

書名	発行所	書名	発行所
布志名大谷III遺跡	島根県教育委員会	大荒遺跡・天田遺跡	春日市教育委員会
布志名大谷I遺跡(1号墳)	島根県教育委員会	大坪遺跡	春日市教育委員会
古志本郷遺跡II	島根県教育委員会	須玖盤石遺跡	春日市教育委員会
恵良遺跡・堂々炭窯跡・上条遺跡・水戸神社跡・立女遺跡	島根県教育委員会	太宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧	九州歴史資料館
熊谷遺跡・要害遺跡	島根県教育委員会	太宰府史跡発掘調査報告書I	九州歴史資料館
丸山遺跡・大楨鉦跡	島根県教育委員会	玄界灘における海底遺跡の探査と確認調査	九州大学大学院考古学研究室
岩屋遺跡・平床II遺跡	島根県教育委員会	福岡県岐志元村遺跡	九州大学大学院人文科学研究院
蟹谷遺跡・上沢III遺跡・古志本郷遺跡III	島根県教育委員会	菅牟田荒谷遺跡	唐津市教育委員会
塩津丘陵遺跡群・小久白墳墓群	島根県教育委員会	外原遺跡	唐津市教育委員会
長廻横穴墓群・長廻遺跡(vol.1)	島根県教育委員会	唐津市内遺跡確認調査	唐津市教育委員会
石見焼陶連遺跡調査報告2	島根県教育委員会	衣干古墳群	唐津市教育委員会
上野遺跡・竹ノ崎遺跡	島根県教育委員会	東山I遺跡	唐津市教育委員会
御崎谷遺跡・大床遺跡	島根県教育委員会	千々賀遺跡	唐津市教育委員会
荒畑遺跡・ラント遺跡・野田遺跡	島根県教育委員会	半田新田遺跡	唐津市教育委員会
山代二子塚古墳	島根県教育委員会	金丸遺跡II	久留米市教育委員会
山代二子塚古墳整備事業報告書	島根県教育委員会	筑後国府跡	久留米市教育委員会
西川津遺跡VIII	島根県教育委員会	横道遺跡II	久留米市教育委員会
石見銀山	島根県教育委員会	大谷古墳群	久留米市教育委員会
石見銀山遺跡総合調査概報(1)	島根県教育委員会	格屋敷遺跡	久留米市教育委員会
石見焼陶連遺跡調査報告1	国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会	旗原遺跡	久留米市教育委員会
戸井谷尻遺跡・長老畑遺跡	国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会	久留米市内遺跡群	久留米市教育委員会
松江市手間古墳発掘調査報告業師山古墳出土遺跡について	島根大学法文学部考古学研究室	久留米市埋蔵文化財調査集報III	久留米市教育委員会
田和山遺跡	松江市教育委員会	山ノ上遺跡・赤坂古墳群	福岡県教育委員会
小野地区の遺跡	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習進行財団埋蔵文化財センター	上唐原了清遺跡III	福岡県教育委員会
東雲神社遺跡	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習進行財団埋蔵文化財センター	西新町遺跡III	福岡県教育委員会
東野中畦遺跡	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習進行財団埋蔵文化財センター	仁右衛門畑遺跡II	福岡県教育委員会
斎庭の遺跡II	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習進行財団埋蔵文化財センター	埋蔵文化財調査報告	福岡県教育委員会
松ノ元遺跡	財団法人愛媛県埋蔵文化財センター	本郷流川遺跡	福岡県教育委員会
鶴ヶ峠古墳	財団法人愛媛県	川原西遺跡(第3地点)	福岡県教育委員会
水戸森遺跡・七反山遺跡・今岡城跡	財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター	曾根田前田遺跡II	福岡県教育委員会
大除遺跡2次調査	財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター	船越高原A遺跡II	福岡県教育委員会
尼ヶ古城跡・かわらがはな窯跡	財団法人愛媛県埋蔵文化財センター	越路六郎遺跡・越路貴船遺跡	福岡県教育委員会
播磨塚天神山古墳	財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	長野古墳群	福岡県教育委員会
福音寺地区の遺跡III	財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	屋永東原遺跡	福岡県教育委員会
大淵遺跡	財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	内ヶ磯窯跡I	福岡県教育委員会
瑞穂・原ノ畑遺跡	大野城市教育委員会	JR筑肥線複線化用地内遺跡群	前原市教育委員会
大野城市の文化財第33集	大野城市教育委員会	有田塞ノ本遺跡	前原市教育委員会
佐賀県大友遺跡	九州大学大学院人文科学研究院	前原西町遺跡	前原市教育委員会
松木遺跡IV	那賀川町教育委員会	三郎九堂ノ上C	宗像市教育委員会
安德原田遺跡群	那賀川町教育委員会	久原瀬ヶ下	宗像市教育委員会
内田遺跡群	那賀川町教育委員会	東郷登り立	宗像市教育委員会
野口遺跡群	那賀川町教育委員会	むなかたの文化財	宗像市教育委員会
宇野地区遺跡群III	新吉富村教育委員会	富地原岩野A	宗像市教育委員会
七夕池古墳	志免町教育委員会	大悟法条里跡池ノ下地区・福島遺跡入垣地区・長者屋敷遺跡	中津市教育委員会
上平田遺跡	春日市教育委員会	長者屋敷遺跡	中津市教育委員会
野藤遺跡	春日市教育委員会	上岸川遺跡	佐賀市教育委員会
大土居水城跡	春日市教育委員会	佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書	佐賀市教育委員会
		石土井遺跡I	佐賀市教育委員会
		野中遺跡	佐賀市教育委員会
		増田遺跡群V	佐賀市教育委員会
		徳永遺跡10区	佐賀市教育委員会
		徳永遺跡12区	佐賀市教育委員会
		上揚遺跡2区	佐賀市教育委員会
		長ノ原遺跡	鳥栖市教育委員会
		長ノ原遺跡・神山古墳	鳥栖市教育委員会
		勝尾城下町遺跡	鳥栖市教育委員会
		安永田遺跡	鳥栖市教育委員会
		今泉遺跡	鳥栖市教育委員会
		永田古墳群	鳥栖市教育委員会
		加藤田遺跡	鳥栖市教育委員会
		京町遺跡	鳥栖市教育委員会
		西田遺跡	鳥栖市教育委員会
		水崎(仮宿)遺跡	美津島町文化財保護協会
		双六古墳	勝本町教育委員会

書名	発行所	書名	発行所
園柳遺跡	勝本町教育委員会	瀬原原遺跡	鹿屋市教育委員会
矢立山古墳群発掘調査概報 (1)	敬原町教育委員会	小野原A遺跡 (III)	鹿屋市教育委員会
大岩田上村遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	小野原A遺跡 (IV)	鹿屋市教育委員会
倉岡第2遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	柵ノ原遺跡	加世田市教育委員会
虎崩・榎木田遺跡、黒勢戸・上示野原遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	西大原遺跡・ヘゴノ原遺跡・流合遺跡・小原ノ原遺跡・愛宕B遺跡・中小路遺跡・別府城跡・志風頭遺跡	加世田市教育委員会
元地原遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	馬神遺跡、堂ノ原寺遺跡	加世田市教育委員会
権現原第1遺跡・下星野遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	弥勒窯跡	加治木町教育委員会
権現原第2遺跡・杉木原遺跡・永ノ原遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	軍原遺跡	高山町教育委員会
池内横穴墓群発掘調査整理報告書	宮崎県埋蔵文化財センター	ホケノ頭遺跡	田代町教育委員会
町屋敷遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	登立遺跡	知覧町教育委員会
志戸平遺跡・頭田遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	宮下遺跡・小房迫前遺跡	垂水市教育委員会
上ノ迫遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	谷添遺跡・出口遺跡	根占町教育委員会
本城原遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	大中原遺跡	根占町教育委員会
松元遺跡・井手口遺跡・塚原遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	留守氏館跡	隼人町教育委員会
右葛ヶ迫遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	牧港岩山の宜野湾ノロ墓	浦添市教育委員会
王子原遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	蘇る琉球国中山王陵浦添ようどれ	浦添市教育委員会
井尻遺跡・雀田遺跡・沖ノ田遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	首里城跡	沖縄県立埋蔵文化財センター
木船遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター		
木城村古墳27号・60号横穴墓	宮崎県埋蔵文化財センター		
内宮田遺跡・柳迫遺跡・中別府遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター		
東九州自動車道(都農?西都間)関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書I	宮崎県埋蔵文化財センター		
梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・養原遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター		
嶋廻遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター		
天神免遺跡	えびの市教育委員会		
小岡丸地区遺跡群	えびの市教育委員会		
長江浦地区遺跡群	えびの市教育委員会		
昌明寺遺跡	えびの市教育委員会		
後平第2遺跡	えびの市教育委員会		
内小野遺跡	えびの市教育委員会		
東川北地区遺跡群	えびの市教育委員会		
島内地下式横穴墓群	えびの市教育委員会		
横市地区遺跡群 馬渡遺跡・坂元A遺跡	都城市教育委員会		
カムイヤキ古窯跡群III	伊仙町教育委員会		
水迫遺跡I	指宿市教育委員会		
下尾下他遺跡	大口市教育委員会		
向井ヶ迫遺跡	大隅町教育委員会		
正戸山遺跡・大久保段遺跡・屋敷段遺跡・今塚段遺跡・貝ヶ塚遺跡ほか	大隅町教育委員会		
東馬場遺跡	大隅町教育委員会		
久保崎IV遺跡その1	大隅町教育委員会		
小中原遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
小牧3A遺跡・岩本遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
竹ノ山AB遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
上野原遺跡 (第10地点)	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
上野原遺跡 (第10地点)	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
東田遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
浅川牧 (I, II) 遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
浜町遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
本御内遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
保養院遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書 (VII)	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書 (VIII)	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
柵掘遺跡、西ノ原B遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
一ノ谷遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
沖田岩戸遺跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
柿内遺跡、大園遺跡、西俣遺跡	鹿児島市教育委員会		
大龍遺跡	鹿児島市教育委員会		
大龍遺跡B地点	鹿児島市教育委員会		
		図録	
		よみがえる北の中・近世 掘り出されたアイヌ文化	財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
		財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 収蔵品目録2	財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
		ようこそ!はにわのふるさとへ 槍の身振り	栃木県教育委員会
		顔がついた土器	千葉県立房総風土記の丘
		図録・長津田遺跡群	大田区立郷土博物館
		三条界隈のやきもの屋	財団法人かながわ考古学財団
		米原町の文化財	土岐市美濃陶磁歴史館
		モノクロームの守り神	米原町教育委員会
		川に生きる	大阪府立近つ飛鳥博物館
		昔むかしのたべものは?	大阪府立近つ飛鳥博物館
		色彩の考古学	広島県立歴史民俗資料館
		古代のメインロード	神戸市教育委員会
		神戸の古墳	神戸市教育委員会
		奴国王の出現と北部九州のクニグニ	神戸市教育委員会
		古代の器	春日市奴国の丘歴史資料館
		久米のきみはあ五百年	久米島自然文化センター
		パンフレット	
		遺跡を翔けめぐる	財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター
		安居窯跡群発掘調査レポート	財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
		北陸新幹線埋蔵文化財包含地調査報告 (2)	財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
		静岡の原像をさぐる	財団法人静岡埋蔵文化財調査研究所
		研究所要覧	財団法人静岡埋蔵文化財調査研究所
		丹波篠山三釈迦山北麓の遺跡	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
		津島遺跡を語る2	岡山県古代吉備文化財センター
		百間川の遺跡探検	岡山県古代吉備文化財センター
		発掘された久田の文化財	岡山県古代吉備文化財センター
		古代体験マニュアルvol.2「縄文風ドングリ料理を作ろう」	島根県教育委員会
		山陰道まいぶんマップ	島根県教育委員会
		石見銀山遺跡ニュースNo.1	島根県教育委員会
		いにしへの川津を掘る	島根県教育委員会
		斐伊川放水路発掘物語part. 7	島根県教育委員会
		前原市文化財整備基本計画	前原市
		川内市文化財ガイドマップ	川内市教育委員会

付編 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

本編は、古環境研究所に依頼した自然科学分析結果報告書を掲載したものである。
報告中の試料地点の表記と、調査名および調査地点との対応は以下のとおりである。

本編	調査コード・調査地点	備考
総合研究棟Ⅱ	2001-3 郡元団地 K-9 区 (総合研究棟Ⅱ 試掘)	本書 3 章報告
理学部改修	2001-2 郡元団地 J-7・8 区 (理学部改修)	未報告
サークル棟	2001-1 郡元団地 M・N-4・5 区 (サークル棟)	本書 2 章報告
J・K-9 区 e4 区	2001-2 郡元団地 J-7・8 区 (理学部改修)	未報告

付編 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	総合研究棟Ⅱ, 19層	炭化物	酸-7Mリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.2	理学部改修, A7区炉層	炭化物	酸-7Mリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No.1	4280±40	-27.3	4240±40	交点: cal BC 2880 1 σ : cal BC 2900~2870 2 σ : cal BC 2910~2860, 2810~2750 2720~2700	169711
No.2	1600±40	-27.4	1560±40	交点: cal AD 530 1 σ : cal AD 430~550 2 σ : cal AD 410~600	166713

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年AD) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68% 確率) と 2σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

文献

Stuiver, M., et. al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

II. 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

分析試料は、総合研究棟Ⅱ，サークル棟，J・K-9区e4区の3地点から採取された計8点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105℃ で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は 2.94（種実重は 1.03）、ヒエ属（ヒエ）は 8.40、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1～図 3 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族 A（チガヤ属など）、ウシクサ族 B（大型）、A タイプ（くさび型）

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 総合研究棟II（図1）

12層（弥生時代中期）、13層（弥生時代中期）、18層、19層（縄文時代中期）について分析を行った。その結果、12層と13層からイネが検出された。このうち、13層では密度が5,400個/gと高い値であり、12層でも4,400個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) サークル棟（図2）

SD1の埋土3（弥生時代中期）と埋土4（弥生時代中期）について分析を行った。その結果、埋土4からイネが検出されたが、密度は700個/gと低い値である。このことから、当時は調査区周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形でSD1内にイネの植物珪酸体が混入したものと考えられる。

3) J・K-9区e4区（図3）

7層（弥生時代中期）と8層（弥生時代中期）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、8層では密度が9,000個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。7層では密度が2,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、総合研究棟IIの13層（弥生時代中期）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、両者の差異は植物分類上でも不明確であり、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか, 1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれており、ウシクサ族B（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

弥生時代中期とされる土層では、上記以外にもヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、タケ亜科などが検出され、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などの照葉樹起源も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢となっていることが分かる。

以上のことから、弥生時代中期とされる土層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺にはススキ属やチガヤ属、竹笹類などが生育する草原的なところも見られ、遺跡周辺にはシイ属、アカガシ亜属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、弥生時代中期とされる総合研究棟Ⅱの12層と13層、およびJ・K-9区e4区の8層からは、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、J・K-9区e4区の7層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

弥生時代中期とされる土層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺にはススキ属やチガヤ属、竹笹類などが生育する草原的なところも見られ、遺跡周辺にはシイ属、アカガシ亜属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		総合研究棟Ⅱ				サークル棟		J・K-9区e4区	
分類群	学名	12層	13層	18層	19層	SD1-3	SD1-4	7層	8層
イネ科	Gramineae (Grasses)								
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	44	54				7	24	90
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		7						
キビ族型	Panicaceae type		7						
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	19	7	81	15			24	41
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	19	142	7	15	128	49	24	90
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	38	61	7		7	56	36	48
ウシクサ族B	Andropogoneae B type		7			7	7		
Aタイプ(くさび型)	A type	6							
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)								
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>					192	63		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	6				21			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	6							
未分類等	Others	19	7			36	49	6	7
その他のイネ科	Others								
表皮毛起源	Husk hair origin	19	47	7					
棒状珪酸体	Rod-shaped	216	319	203		64	90	212	297
茎部起源	Stem origin		7	68			14	6	
地下茎部起源	Underground stem origin		7	20					
未分類等	Others	203	305	264		107	236	291	394
樹木起源	Arboreal								
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	13						6	7
ブナ科(アカガシ亜属)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	6						30	7
クスノキ科	Lauraceae	44						18	
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	51					21	73	21
その他	Others	6	34			14	21	73	21
植物珪酸体総数	Total	716	1011	655	29	577	611	825	1023

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.30	1.60			0.20	0.71	2.64
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		0.57					
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	1.20	0.43	5.12	0.92		1.53	2.62
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.24	1.77	0.08	0.18	1.59	0.60	0.30
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>					2.23	0.73	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03				0.10		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.02						

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>		96	100
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	62	4	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	38		

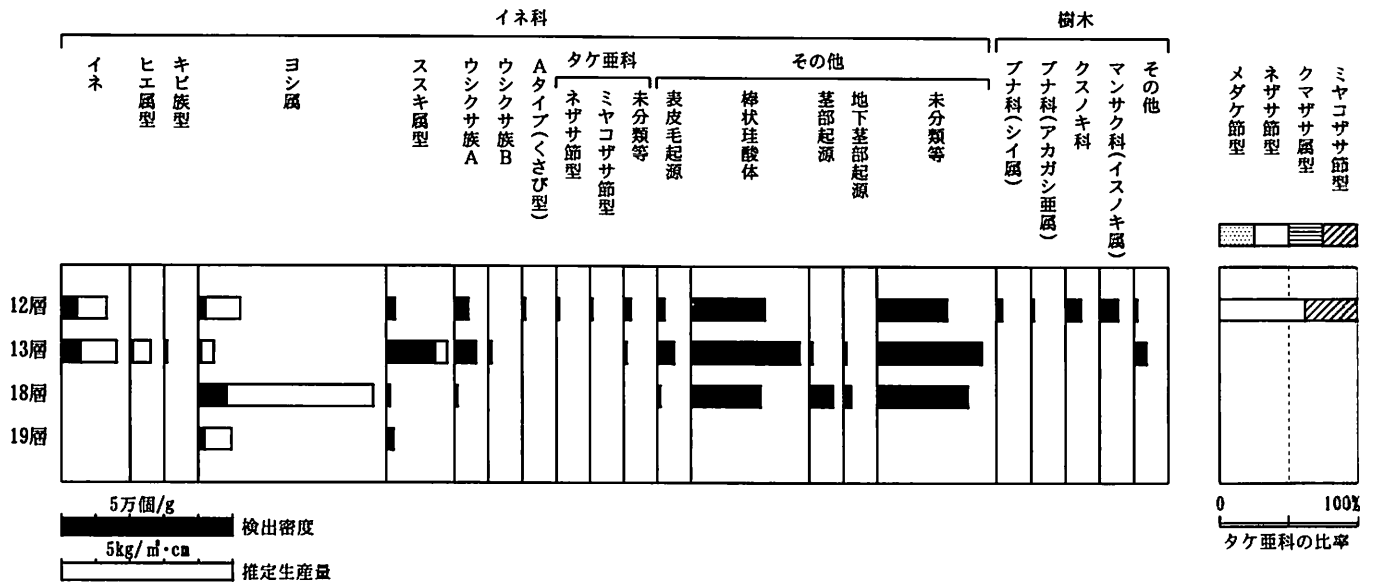


図1 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地総合研究棟IIにおける植物珣酸体分析結果

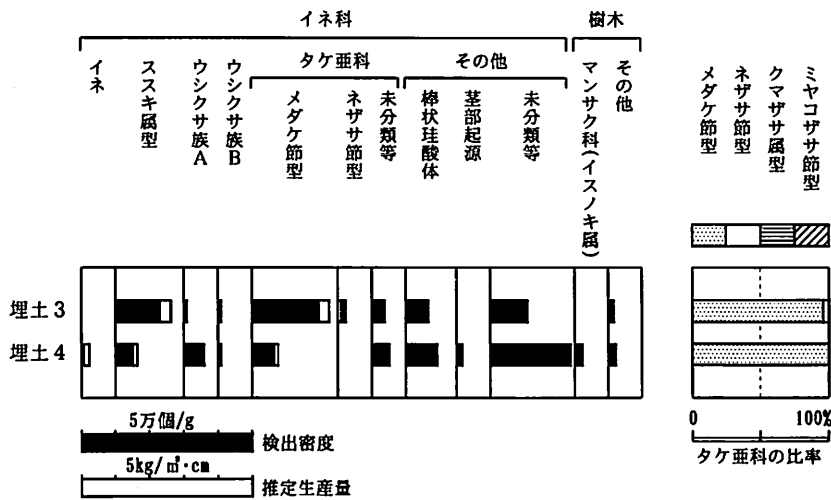


図2 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地サークル棟SD1における植物珣酸体分析結果

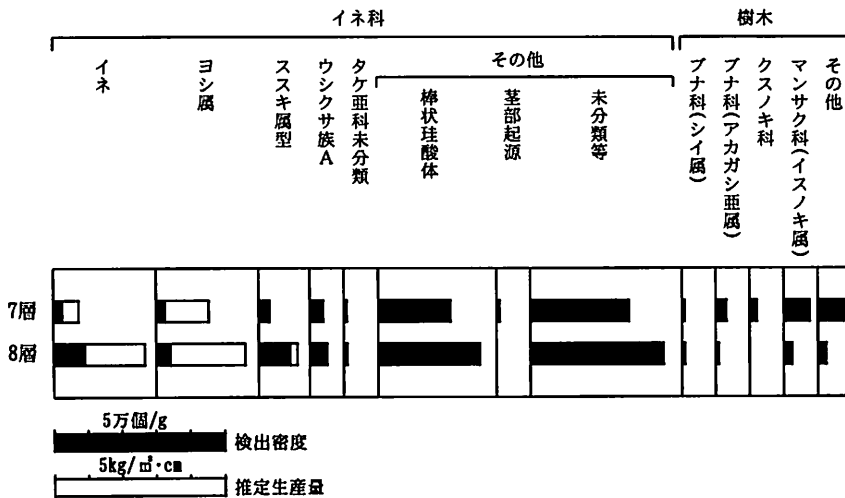
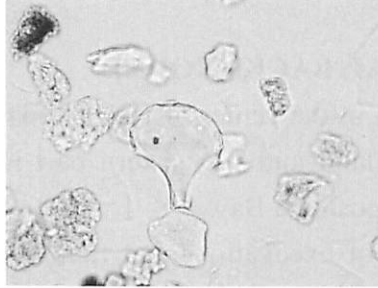


図3 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地J・K-9区e4区における植物珣酸体分析結果



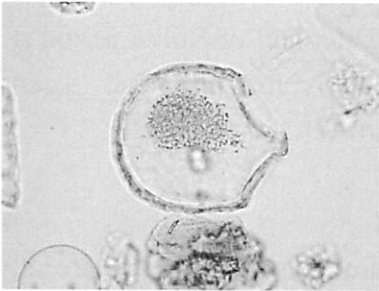
イネ
総合研究棟II 13層



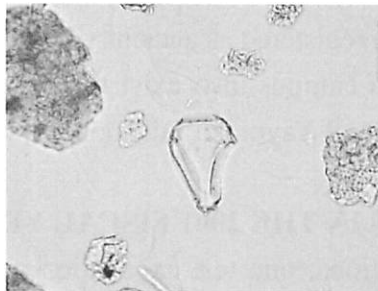
イネ
J・K-9区e4区 7層



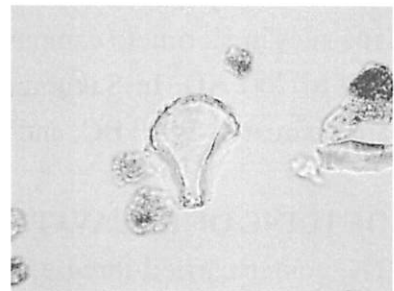
イネ (側面)
J・K-9区e4区 7層



ヨシ属
総合研究棟II 13層



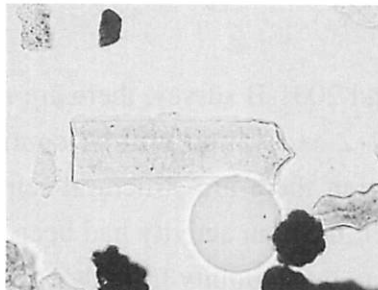
ススキ属型
J・K-9区e4区 8層



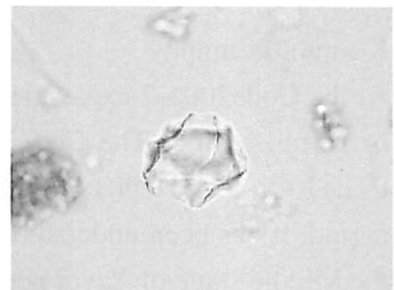
メダケ節型
サークル棟 SD1-3



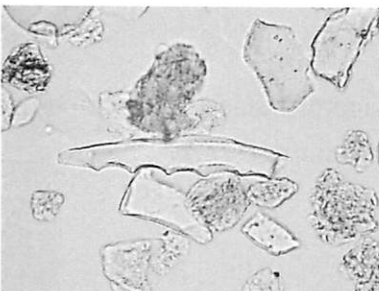
棒状珪酸体
総合研究棟II 13層



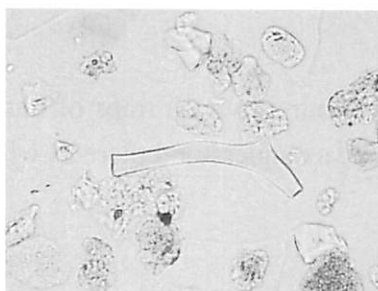
イネ科の茎部起源
総合研究棟II 18層



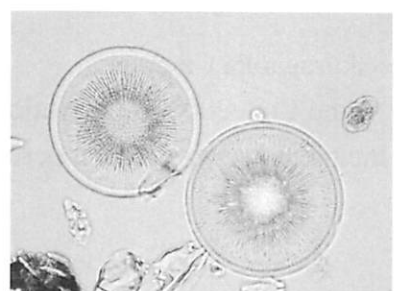
ブナ科 (シイ属)
J・K-9区e4区 8層



クスのノキ科
J・K-9区e4区 7層



マンサク科 (イスノキ属)
J・K-9区e4区 7層



珪藻
総合研究棟II 18層

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

50 μm

SUMMARY

This is the report of the rescue excavations and surveys of the sites in the campuses of Kagoshima University in the 2001 fiscal year.

LOCATION AND HISTORICAL BACKGROUND

Kagoshima University is located in the center of Kagoshima city, south Kyushu Island. The western part of the city is highland and the eastern part is lowland. Active volcano Mt. Sakurajima is in the center of Kagoshima Bay.

This report includes the results of excavations and field surveys at Korimoto campus and Sakuragaoka campus. Korimoto campus is located in the lowland, Sakuragaoka campus is located in the highland.

The sites in Korimoto campus are registered as ancient villages in latter half of Kofun period at 500 to 700 AD. In Sakuragaoka campus also exist the sites in early Jomon period dated approximately 9500 BC, and those of Yayoi period from 300 BC to AD 250.

OUTLINE OF EXCAVATIONS IN THE 2001 FISCAL YEAR

The center carried three excavations, one test excavation and nine surveys. They were all rescue archaeological surveys in the 2001 fiscal year.

Korimoto Campus

At the Code2001-2 excavation and 2001-B survey, there are many pit dwellings of latter half of Kofun period. The Code2001-2 excavation will be continued also to next year. At the Code2001-1 and 2001-2 excavation there are structural remains of Middle stage of Yayoi period. It has been understood that the man activity had been done for about 1000 years from the Middle stage of Yayoi period to the antiquity from those investigation results on Korimoto campus.

Sakuragaoka Campus

At the Code2000-2 excavation, we found four pit traps of Late stage of Palaeolithic period or Incipient stage of Jomon period. It was understood there as with of hunting.

報告書抄録

ふりがな	かごしまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぼうじゅうなな							
書名	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 17							
編著者名	中村直子・新里貴之・寒川朋枝							
編集機関	鹿児島大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目 21-24 Tel 099-285-7270 FAX 099-285-7271							
発行年月日	2003 年 3 月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町 村	遺跡 番号					
かごしまだいがく こうない こうない こおりもと えむ M・N 4・5区	かごしまし こおりもと1ちょうめ 郡元一丁目 20-6	4620		31 34 11	130 32 48	20010925 ～ 20011104	800 ㎡	校舎建 設
かごしまだいがく こうない こおりもと えむ 郡元団地K・ 9区	かごしましこおりもと 1ちょうめ 一丁目 21-40	4620		31 34 11	130 32 48	20020313 ～ 20020326	4㎡	校舎建 設に伴 う試掘
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鹿児島大学構 内遺跡 M・N・ 4・5区		古墳時代 弥生時代	溝状遺構 ピット群	陶磁器 笹貫式土器 弥生土器（入来式・山ノ口 式・高付式・中津野式） 土錘 磨製石鏃 打製石鏃 擦石				
鹿児島大学構 内遺跡 K・9 区		弥生時 代・古墳 時代	土壙状遺構 小ピット群	陶磁器 古墳時代の土器				

鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報17

2003年3月発行

編集・発行 鹿兒島大学埋蔵文化財調査室
鹿兒島市郡元一丁目21番24号
TEL 099-285-7270

印刷 斯文堂株式会社
鹿兒島市新屋敷町14番16号
TEL 099-226-3747

Kagoshima University Research Center for Archaeology Report Vol.17

CONTENTS

Chapter

- | | | |
|---|--|----|
| 1 | Report of archaeological research in fiscal year 2001 | 1 |
| 2 | Report of excavation at Area M·N-4·5 in Korimoto Campus | 6 |
| 3 | Report of test excavation at Area K-9 in Korimoto Campus | 19 |
| 4 | Report of rescue surveys | 23 |

Appendix

- | | | |
|--|---|----|
| | Report of radiocarbon dating and plant opal analysis of excavated samples from
Korimoto Campus | 41 |
|--|---|----|

Published by
Kagoshima University Research Center for Archaeology
2003